



丹波茶処 「味間奥里づくりプラン」

—味間奥地区土地利用基本計画報告書—



目次

○序章 はじめに

- ①名称及び区域 1
- ②茶の里味間奥里づくりプラン— 味間奥地区整備計画—とは 2
- ③里づくり計画の背景 2

○第1章 味間奥地区の現況

- 1. 味間奥地区の成り立ち 4
- 2. 味間奥地区の家並みと土地利用特性 8
 - ①味間奥地区の家並みと景観特性 8
 - ②味間奥の土地利用特性 9
- 3. 味間奥地区の土地利用及び景観特性 15
- 4. 人口・世帯数 19
- 5. 文化財等の歴史的資源 20
- 6. 味間地区の魅力と問題点・課題（ワークショップ等から） 24
 - 地域づくりの方向性 29
 - 味間奥の風景カルタ 31

○第2章 計画の基本方針

- 1. 住民の望む空間像 42
- 2. 味間奥地区の将来像 43
- 3. 計画の基本方針 44

○第3章 基本計画

- 1. 基本計画の枠組み 46
- 2. 土地利用計画（ゾーニング） 47
 - 立地可能な施設の用途 48
- 3. 「いえ・にわ」づくりガイドライン（建築基準） 51
 - 建築基準一覧 53
 - 「いえ・にわ」づくりガイドライン（配慮基準） 54
- 4. 緑の散策ネットワーク計画 59
- 5. 緑化修景計画 63
- 6. 推進体制と今後の運用について 67

図 表 目 次

○図面目次

図-1	味間奥位置図	3
図-2	計画区域図	3
図-3	味間奥地区の主要施設分布図（現況）	7
図-4	幹線道路と谷川による味間奥地区の六つのブロック区分	10
図-5	文化財等の歴史的資源位置図	23
図-6	主要な視点場位置図	39
図-7	土地利用検討図	40
図-8	土地利用現況図	41
図-9	農用地区域図	48
図-10	土地利用計画図	49
図-11	敷地面積 250㎡、建蔽率 60%住宅地模式図	52
図-12	二戸一カーポートの住宅配置図	52
図-13	壁面位置交代模式図	55
図-14	地区内において開発行為・建築行為を行う際の手続きフロー	68
図-15	散策ネットワーク構想図	69

○表目次

表-1	江戸期の石高等の推移（味間奥）	5
表-2	味間奥石高と茶高（1714）	6
表-3	味間奥地区の人口・世帯数の推移	19
表-4	味間奥地区の人口比率一覧	19
表-5	味間奥地区の歴史文化資源	20
表-6	味間奥地区の魅力	26
表-7	味間奥の共有資源	27
表-8	味間奥の問題点と課題	27
表-9	地域づくりの方向性	29
表-10	味間奥の風景カルタ（住民の撮影対象 2007 と選定読み札）	31
表-11	味間奥の土地利用区分	47
表-12	ゾーン別施設可能な建築施設の用途	50
表-13	建築基準一覧	53
表-14	建築物・工作物のガイドライン	56
表-15	植栽及び外構に関するガイドライン	58

2008.3.



●序章 はじめに

① 名称及び区域

- 本計画は、篠山市「茶の里味間奥里づくりプラン」―味間奥地区土地利用基本計画―（2008）と称する。
- 本計画の適用範囲は、味間奥地区住民が土地権限等を有する概ね図-2 の領域である。
- 計画区域面積は、約 393ha
- 人口 480 人 世帯数 124 世帯
- 高齢者比率 40.0%（29.4%）、年少比率 11.5%



住吉川の上流域の谷筋で、三方を連山に取り囲まれている。味間地域の最も奥まった所に位置し、貞享元年（1684）頃味間村から分村して成立した。谷筋奥の小峠川沿いの奥村と文保寺川が住吉川と合流する源左衛門村を中心に集落が形成されている。茶畑は、水坂谷から流化する住吉川と文保寺川の扇状地に形成されている。（航空写真：2005年撮影）

② 丹波茶処「味間奥里づくりプラン」—味間奥地区整備計画—とは

丹波茶処「味間奥里づくりプラン」は、「緑条例」(緑豊かな地域環境形成に関する条例)に基づき、味間奥地区住民で組織する味間里づくり研究会を中心に策定提案した地区レベルの土地利用及び建築物等の開発誘導を図る計画です。味間奥住民の参画と合意により、茶の里味間奥にふさわしい秩序ある土地利用を維持し、生産環境、生活環境、自然環境、景観の保全・整備、創出を行い、住みやすく、働きやすい、住民誰もが誇りに思えるふるさとの環境形成を目指しています。同時に茶や黒豆に代表される農業を振興し、茶畑の広がる田園環境として生活と生産が一体化した活力ある里づくりを目指しています。

③里づくり計画の背景

●味間奥地区に吹く地域振興への期待

味間奥地区は、江戸前期の貞享元年(1684)頃、味間村から分村して成立しています。それまでは古刹大國寺の裾部に家屋が数軒づつ点在分布する寒村でしたが、東の文保寺と松尾山の高仙寺では、一山として一大修験道の道場が開かれ、多くの修験者が修行していたと想定されます。丹波に茶栽培が普及するのは室町時代、味間奥でも山裾で栽培されますが、江戸時代の平地部の新田開発に伴い谷奥へ栽培地が移動し、畑地を利用した一大生産地が形成されたと思われます。同時に古佐から阿草に向かう小峠の阿草道が形成され、徐々に東西を貫く阿草道に沿って大國寺周囲の源左衛門分と熊野神社の位置する奥村に家屋が立地するようになり、今日の味間奥地区が形成されていきます。高台となる水坂谷と諏訪山裾部の文保寺川の扇状地を活かして集落の南側高台に一面茶畑が広がる景観は、江戸中期から継承されたもので、文字通り味間奥の原風景を形成しています。南の山裾には戦国期から築造してきたため池が分布するだけでしたが、平成4年にやすらぎ園が整備され、他地域から通う車や通過する車も多くなり、集落を貫く西脇篠山線も手狭となり、平成18年茶畑を東西に貫くバイパスが幹線道として整備され現在も延長工事が進められています。こうした基盤整備に伴い諏訪山裏手に新興住宅地が建設されるようになり、バイパス沿いには、新たに事業所や工場が立地する動きもあり、地域景観は大きく変貌しようとしています。

一方味間奥地区でも少子高齢化が進展しており、高齢者比率はすでに35%に近く、味間地区でも高い比率となっています。このため農地の維持は、年々困難となり、茶畑も含め、今後耕作放棄地が増加し、農地の流動化や河畔の竹林や栗林、里山の荒廃・粗放化など、コミュニティの希薄化とともに農村環境の荒廃化が懸念されています。これまでの地権者管理に代わる新しい維持管理方策が期待されています。

●求められる秩序ある土地利用

味間奥地区は、家屋間に農地や茶畑が適度に介在する集落環境が特徴的ですが、畑地が多い土地柄を反映し、家屋周囲には、農振除外地が数多く分布しています。このため、元来から宅地開発されやすい環境を有しています。茶畑といった味間奥地区特有の景観は、今日増大している田舎暮らしの羨望の的となる恐れもあり、バイパス整備に伴い無秩序な宅地化の進行も懸念されています。また一方では、少子高齢化による地域の担い手不安から計画的な住宅開発等により、若者



茶畑の広がる味間奥地区。味間奥の原風景を構成している。



茶畑越しに見る新興住宅地。徐々に新興住宅地も見られ始めた。

定住促進による地域の活性化も期待されています。

このため、今日まで継承してきた茶の里の風土景観を継承するために地区の望ましい将来像を明確にするとともに、地区住民の総意に基づき今後開発を許容していく所と保全すべき所を明確にした計画的な土地利用と建築ルールを定める「里づくり計画」を策定し、秩序ある土地利用と建築物等の適切な開発誘導を図っていくことが求められています。



図-1 味間奥位置図

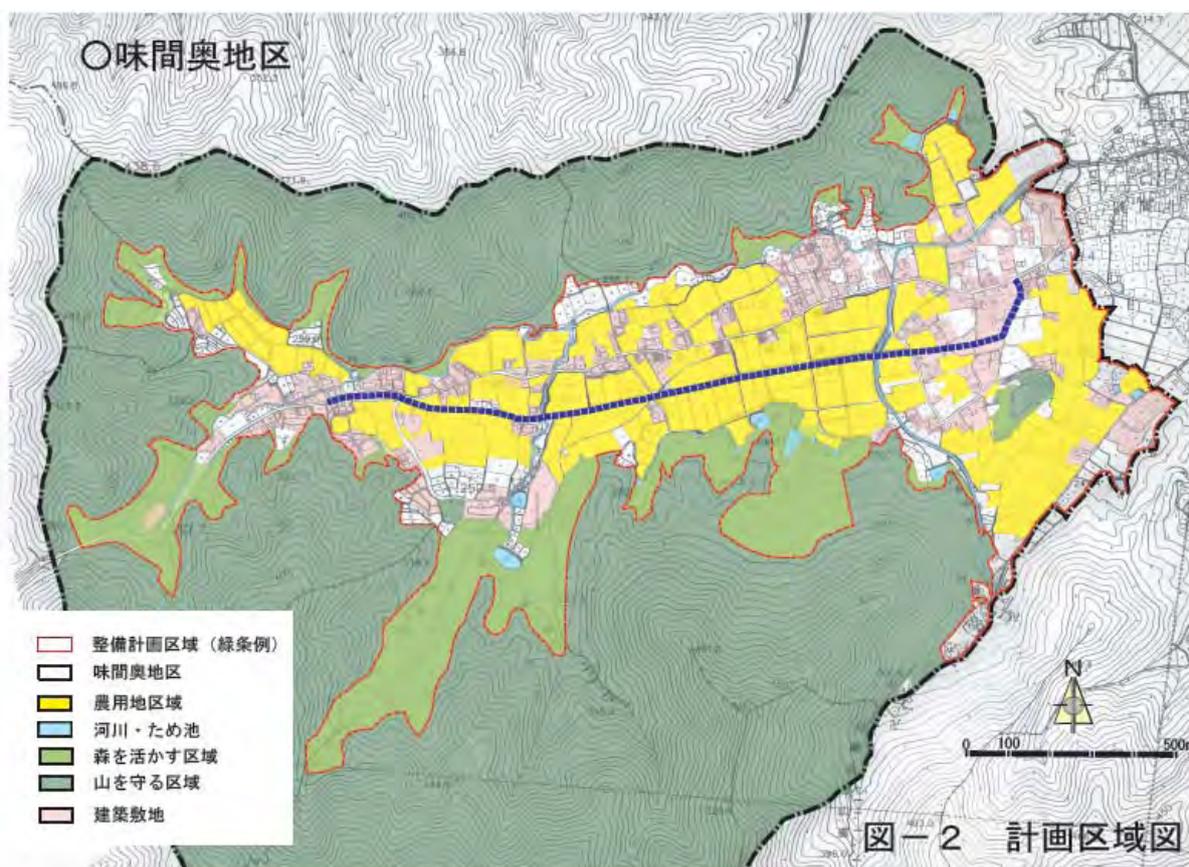


図-2 計画区域図

●第1章 味間奥地区の現況

1. 味間奥地区の成り立ち

■住吉川の谷筋に位置する味間奥地区

●古代の味間(阿知万)

味間の地名呼称は、東南の大沢沼沢に葦が繁茂し、葦間から見える対岸の地に由来する。古くは「阿知万」と記載され、住吉社領の椅鹿山領地の四至の北限を成した。味間奥に人が住みついたのは弥生から古墳時代と想定され、

味間南遺跡(弥生)や味間奥の諏訪腰古墳がそれを物語っている。大国寺の名称が出雲神話の神である大国主に由来することから、古代出雲系の神を祀り住みつき開墾していったと想定される。

●中世成立した味間奥の村落

味間の記載は、南北朝期の応安4(1371)年「吉田日記」に大山荘地頭の中沢氏と清涼寺雑掌が味間二品勅旨田を横領したのを幕府に訴え、丹波守護の山名氏清がこれを停止させた記載が、初見となっている。大国寺が大化年間(645～650)開創といわれ、文保寺も大化元年(645)法道仙人により開基と伝えられていることから、味間奥にも中世の初期には集落が構成されていたと想定される。荘園の味間二品勅旨田の名称から当初味間地域の荘園は皇室領として始まり、南北朝期には吉田神社領となった。室町の永禄7(1564)年には、味間(三崎)伊豆守秀友が知行し、荘園は消滅している。

当時の味間奥は、古刹の大国寺の山裾部に数軒の家屋が散居状に分布していたと思われ、東に流れる小峠川や住吉川沿いに農地が開墾されていたものと想定される。同時に東南の文保寺は、聖備山長流寺と称し、文保寺から松尾山を経て高仙寺を巡る山回りの回峰修行が松尾山頂上の仙人岩を中心に行われ、明德年間(1390～1394)には吉野桜本坊の勧めで一山が修験の寺となっていたと伝えられている。長保年間(999～1003)2寺となり、平安期には21坊を数えたが、天歴(947)の乱で焼失し、正和年間(1312～17)に再興、文保年間(1317～18)に文保寺と改称し、室町期には5院16坊となるが、光秀の丹波侵攻で灰塵と帰し、江戸中期6カ院まで復興するが、現在真如院、大勝院、観月院の3院となっている。

●波多野源左衛門分の成立

江戸期の地名ともなる大庄屋の波多野源左衛門定吉(定尚)は、八上城主波多野秀治の次男勘蔵あるいは勘蔵の孫(定尚)とされる人物で、味間奥の伝承では、秀治の次男勘蔵は3歳の時乳母とともに黒田村に隠棲し、11歳で松尾山文保寺に入門し寺主となり、30歳の時環俗し源左衛門定吉と号した。篠山二代目藩主の松平忠国が定吉を味間・小野原2郷7カ村の代官に任命し、定吉は波多野秀治を祭神とする御霊神社(丹波神社)を明暦年間(1655～57)に建立し、同時に秀治供養の満願寺を建てたと伝えられている。4代藩主康信の時、承応2年(1653)新検地に際し、味間奥村内に点在する源左衛門の抱地を別免源左衛門分とした。すなわち波多野源左衛門分は、波多野家の抱地に与えられた名称で、江戸期を通じて味間村の一部として扱われた。

定吉が独自の領地を有したのは、家臣団の定住とともに自らため池築造等で新たな水利を開き住吉川北側の谷筋を開墾したものと想定されるが、秀治没後光秀との密約によるとも考えられる。いずれ



味間奥の古刹大国寺



波多野秀治の墓。辞世の句は『よりわかる心の闇に迷わねば物見せん後の世にこそ』と伝えられている。

にせよ波多野源左衛門の領地が成立したことによって味間奥が一体となり、大国寺を中心に集落らしいたたずまいが整っていったと想定される。

●近世の味間奥—ため池築造に伴う新田開発

明暦3年(1657)味間村から波多野源左衛門分が分離し、貞享元年(1684)味間から味間奥として味間南、味間北、文保寺分とともに分村している。文保寺分は、波多野源左衛門分と同様に承応2年(1653)の新検地の際、文保寺の一山永続維持のため味間奥村、味間南村各所に点在する寺領の別免状を願出し、貞享元年(1684)別免となり成立した。



江戸中期、奥右衛門によって開発された通称おつきよ谷。

分村の要因は、生産高の向上による人口の増大等に伴い一村としての社会的態を成したことによる。味間奥では、ため池築造により、田畑が開墾していったと思われ、記録に残るため池築造としては、

- 源左衛門池—慶安元年(1648)普請—水掛55石
- 水坂上池—慶安2年(1649)普請—水掛55石 5 升
- 水坂新池—天保8年(1838)普請—水掛45石
(水坂下池—水掛 27 石、松本池—水掛20石)



今も水をたたえる水坂下池

となっている。石高等は、下表のとおりである。戦国から江戸前期に随時ため池が築造され、住吉川の谷筋より高台の向山等の農地が開墾されていったものと想定される。また現在砂防ダムのある通称おつきよ谷は、江戸中期、奥右衛門らが開墾し、土地を所有したことに由来しており、これも江戸期成立した新田の一つである。江戸前期のため池築造に伴う新田開発によって味間奥の生産基盤はほぼ整い、今日に近い水田地が形成されたと思われる。

表-1 江戸期の石高等の推移 (味間奥)

	文禄3年(1594)	明暦2年(1656)	天明3年(1784)	嘉永年間(1848~54)	明治24年(1891)
味間奥	182石 7 斗 5 升	265石 2 斗 8 升	265石 家数 50 人口267人	人口222人	112 世帯 人口 454 人
源左衛門分	116石 4 斗 5 升	236石 2 斗	236石 家数 51 人口243人	人口163人	
文保寺分	117石 4 斗 4 升	144石 7 斗	144石 寺 7 うち無住 3	—	

※文保寺分の耕作は味間奥村が行っていた

○江戸中期—扇状地の原野や畑地を活かした茶畑の形成

丹波地域に茶栽培が普及するのは、室町時代といわれ、丹波では天台寺院を中心に栽培されてきた。多紀郡における茶の初見は、16 世紀初頭波多野元清が細川高国(1484~1531)へ正月の贈物として差し出している請取状である。また天正 17 年(1590)には秀吉が茶園所有者に対し、公儀の郡役を課し、江戸期には京都郡代を経て幕府に収めた。江戸初期旧丹南町の茶園面積は、41町5反、茶役米が12石うち真南条組が4石、味間を含む大沢組が3石5升となっている。次表に見るように正徳4年(1714)には耕地面積のうち約4割近くが茶園となっている。栽培は江戸初期には上層農民に限られていたが、中期には一般農民層に広がり、幕末には海外貿易による茶の需要増大もあって、栽培は零細農民にまで及んだ。明治2年には、海外市場の需要拡大を背景に茶商社が設立している。この茶畑

は、水坂の地名が物語るようにかつて住吉川や文保寺川の氾濫原であった山裾の扇状地に形成されたもので、谷川の土砂が堆積し土地が安定したのに伴い、ため池水利では水掛の悪い原野や畑地を茶畑として開墾利用したものといえる。礫の多い扇状地を味間奥の人々は、時間をかけて茶畑として改善してきた農地であり、江戸中期には、今日に継承される茶畑のほぼ全体が開墾され、一面に広がる今日の茶畑景観を形成したといえることができる。

この他、味間奥には、字水坂ノ坪と小峠ノ坪に鉱山があり、江戸期には銅・銀が採掘されている。

表-2 味間地区の石高と茶高 (1714)

	村高	うち茶高	茶高率	備 考
味間奥	265 石	87 石	32.8%	
源左衛門分	236 石	80 石	33.9%	
文保寺分	145 石	70 石	48.3%	
味間奥地域	646 石	237 石	36.7%	
大沢組	2,086 石	570 石	27.3%	

味間村から味間奥として分村した当時は、645石、家数約100余、人口約500人の集落を構成したと想定される。ほぼ明治24年の味間奥村成立期とほぼ同数の家屋数であり、今日の扇状地に茶畑が広がり、家屋が東西に貫く阿草道に沿って農地を介在させながら散居状に家屋が点在するたたずまいは、江戸中期に形成され、今日に継承されてきたものと言える。

○丹波杜氏の隆盛

江戸中期以降貨幣経済の進展とともに余業として享保(1720)の頃から伊丹、池田、新しく発展してきた灘への丹波杜氏が盛んとなり、農閑期の出稼ぎとして定着した。そのうえ、多紀郡には、追入の園田家をはじめ酒造7家があり、江戸に船積みするほど盛んであり、杜氏として腕が良かったことも酒造業従事に拍車をかけた。

集約的農業の定着により小農の生産量が増大すると共に、出稼ぎが農業収益を上回るようになると労働者不足と賃金の高騰によって小作人や奉公人、災害時の普請人口が不足し、藩は禁止令を出す効果が上らず、やがて農耕のみの庄屋層が衰退し、農地を手放す役家百姓が多くなり、全体的に農家の生活は窮乏の一途を辿り、他出するものが増え、幕末時には人口が380人前後に減少している。

●近代～今日の味間奥

明治5年文保寺分、同18年波多野源左衛門分を合併し、明治22年味間村の大字「味間奥村」となる。昭和30年味間村は合併し丹南町となり、平成11年篠山市となり、市政が施行されている。

幕末から明治になると養蚕が換金産物として指導奨励され、茶園を除くほとんどの畑地で桑栽培がおこなわれ、味間奥村養蚕組合が設立し、昭和初期まで盛んに栽培された。戦後も一時復旧するが、高度成長とともに衰退した。一方茶は、国際商品として明治以降も脚光を浴び、味間は県下一の茶所として今日に至っている。味間の代名詞といふべき「大国寺と丹波茶まつり」は、昭和56年から開催し、今日では味間地区のまちおこし行事として定着している。また近年の転作作物として枝豆として人気の黒大豆や山の芋も盛んに生産されている。



農地を東西に縦貫するバイパスの西脇篠山線

幕末の儒学者：園田藤右衛門の寺子屋から明治6年味間小学校の前身となる日就舎が創立され、

味間奥の字奥谷ノ坪に枝校として西校が置かれた。明治20年味間簡易小学校となり、明治42年味間尋常高等小学校に吸収され、昭和3年吹小学校と合併し修得尋常小学校となり、昭和22年今日の味間小学校となっている。

明治33年東吹から小峠までの阿草道が里道として改修され、昭和6年の改修を契機に県道に認定されている。現在のバイパスとなる西脇篠山線は、平成4年より設計に着手し、平成18年現在の区間が開通している。また味間奥の土地改良事業は、昭和61年農村総合整備モデル事業として向山周辺2.3haを施工している。昭和63年には茶の里会館が竣工し、平成4年には水坂の谷合いに福祉施設の「やすらぎ園」が茶畑の高台に鎮座するように開園し、今日に至っている。



図-3 味間奥地区の主要施設分布図（現況）



昭和63年竣工した「茶の里会館」



平成18年一部開通したバイパスの西脇篠山線

2. 味間奥地区の家並みと土地利用特性

①味間奥地区の家並みと景観特性

○家並み一平入りの民家と中門造り

味間奥地区は、中世まで住吉川沿いのわずかな農地を開墾し、草分け垣内した寒村であり、現在も農地間に家屋が点在分布する散居集落を物語るたたずまいを残している。散居集落では、家屋の安全性を高めるため門塀を設けた独立性の高い家屋が中心となるが、味間奥でも大半が母屋を中心に南側に作業庭を設け、左右に離れや戌亥倉を配し門塀で取り囲む形で形成しており、俗に撰丹型と呼ばれる妻入り民家はほとんど見られず、大半が播磨型の平入りである。

また源左衛門分には、熊野神社周囲の奥村には見られない中門造り(角屋造り)の格式の高い家屋が見られ、堀と長屋門を有する波多野家など集落中央にどっしりと構える家並みは、武家地の名残を残す景観を形成している。



文保寺川沿いに位置する中門造りの家屋。
(旧源左衛門分)

○農地が介在する散居のたたずまい

阿草道である西脇篠山線沿いに立地する家屋は、1～2枚の農地を介在させながら、道を挟んで正面に家屋同士の玄関が立地することなく、互い違いになる形でプライバシーに配慮しゆとりを持って配されている。こうしたゆとりを持った敷地構成は、沿道であっても一軒一軒の家屋全景が視対象となる特徴をもつ。このため、沿道であっても連続する街並みとしてではなく、一軒一軒の独立性を尊重しながら、沿道からの見え方を意識し、全体としてまとまりある家屋のデザインが求められている。

○高低差を活かした土地利用—造成は最低限とし、屋根のシルエットを大切とする

元来味間奥地区の地勢の特徴は、東に開けた谷筋を貫く小峠川や住吉川が、谷筋の最も低い北川を流化していることで、その谷川沿いに平行に配された西脇篠山線沿道は、谷筋全体から見ると低い領域に位置している。東西に細長い谷筋は、南側が高く北側へ傾斜する形となり、西脇篠山線より南側は、家屋の立地する居住域よりも高い敷地を成している。東西に流れる小峠川と住吉川沿いの農地や家屋周りや西脇篠山線より北側の農地が家屋とほぼ同等かやや低い敷地基盤となる。したがって向山等の圃場整備された農地と接して立地する家屋は、接する面でひな壇型の高低差が生じている。西脇篠山線より北側の農地や家屋敷地も詳細に見れば、地勢の高低差を活かして立地しているのが解る。この地勢の有する高低差を尊重し活かすことが大事であり、敷地造成は必要最小限とすることが原則となる。現在の道路構成から考え、小峠川や住吉川の低地から見る機会はほとんどなく、味間奥の家並みは、大半が高い敷地から俯瞰する形となる。こうした居住域を家屋よりも高い位置から見る場合は、基礎部などの建築物の足元は畦等で遮蔽される形となり、ほとんど見ることができず、気にならない形となる。遠くから眺めれば眺めるほど建築物は大地に根ざした形で視覚され、水平美が強調され建物壁面なども低く抑えられた印象となる。すなわち味間奥のような地勢と集落家屋立地では、屋根の形状やシルエットが最も大切となる。味間奥の家並み景観の秩序は、独立した家屋として見た場合の全体のまとまり(安定感)と屋根形状のデザインに集約される。



南から望めば、農地が高く、家屋の立地する居住地は低い。家屋の一階壁面は農地や畦で遮蔽され、一階の半分程度しか視覚されない。

○屋敷を柔らかく包む緑豊かな外構一家並みの見え隠れ

こうした視点で一軒一軒の家屋を捉えると緑豊かな外構に驚かされる。家屋敷地の裏手や脇には畑地があり、敷地際に植栽されたカキノキ等が建物の見え隠れを演出する。街路の脇道角や家屋敷地の角地にはひと回り大きい樹木が門塀の外に植栽されており、南庭の庭木とともに建物を柔らかく包む緑が取り巻いている処が多い。宅地が農地や水路と接する所では畦や土羽の堤防に畦畔木や竹林が植栽され、それらが宅地の敷地際の緑として散居状に分布する家屋の独立性を高め、建物をソフトに遮蔽する緑としてより効果的な配植となっている。こうした味間奥の里のもつアノミナスナ緑景を新しい建築施設にも外構植栽として活かしていく必要がある。

②味間奥の土地利用特性

谷川が流化する北の山裾に向かって傾斜する地勢の上に奥村と源左衛門分から構成された集落立地を踏まえ、新しく整備されたバイパスと南北に流化する住吉川と文保寺川によって図一のように味間奥地域の谷筋を6つに区分し、それぞれの土地利用特性(現況詳細)把握と新しい土地利用計画への視点を検討する。

1) 熊野・奥右衛門谷の土地利用

- ・奥右衛門谷は、今から7代前の近世末に新田開発として奥右衛門らが草分けとなって開墾した土地と伝承されている。新田として開発されたのは、農地形状から考え、現在の砂防ダム裾部から谷川用水沿いと考えられ、谷口に当たる山裾に茶畑の位置する高低差の少ない農地は、中世来のもものと想定される。山裾には近世屋敷等が立地していた可能性もあり、阿草道沿いへの移転後農地として利用した所もあると思われる。現在は谷筋奥に1軒見られるのみであるが、谷筋の田園農地として水路法面も含めよく管理されている。
- ・熊野神社の鎮座する小峠川沿いは、阿草道に沿って数軒の家屋が農地を介在させながら、沿道に分布している。奥右衛門の谷口に当たる熊野神社より西や沿道の南側は蔵のない比較的新しい家屋が多く、近世は熊野神社を最奥部の結界として熊野園の位置する東側の北側沿道のみ家屋が立地していたと想定される。それらの家屋は、背後の小峠川まで宅地として短冊形に利用されており、阿草道から小峠川まで短冊形に区画敷地を形成し利用が図られている。現在介在する農地も家屋敷地と同じ短冊形であり、味間奥村の土地利用の原型はこの短冊形の敷地であると想定される。このため家屋背後に街路が形成されないまま今日に至っており、この短冊形の土地利用区分は、味間奥特有の敷地割として今後も尊重すべき土地利用の原型単位のひとつと言える。



水路沿いの畦畔木等の緑が、家屋裏手をやさしく包む。



谷奥に一件の家屋が位置する奥右衛門谷の景観。



熊野神社を結界に阿草道に沿って数軒の家屋が分布する奥村(小峠川沿)。



阿草道と新しいバイパスの間には水坂の扇状地裾部に当たり一面茶畑が広がる。

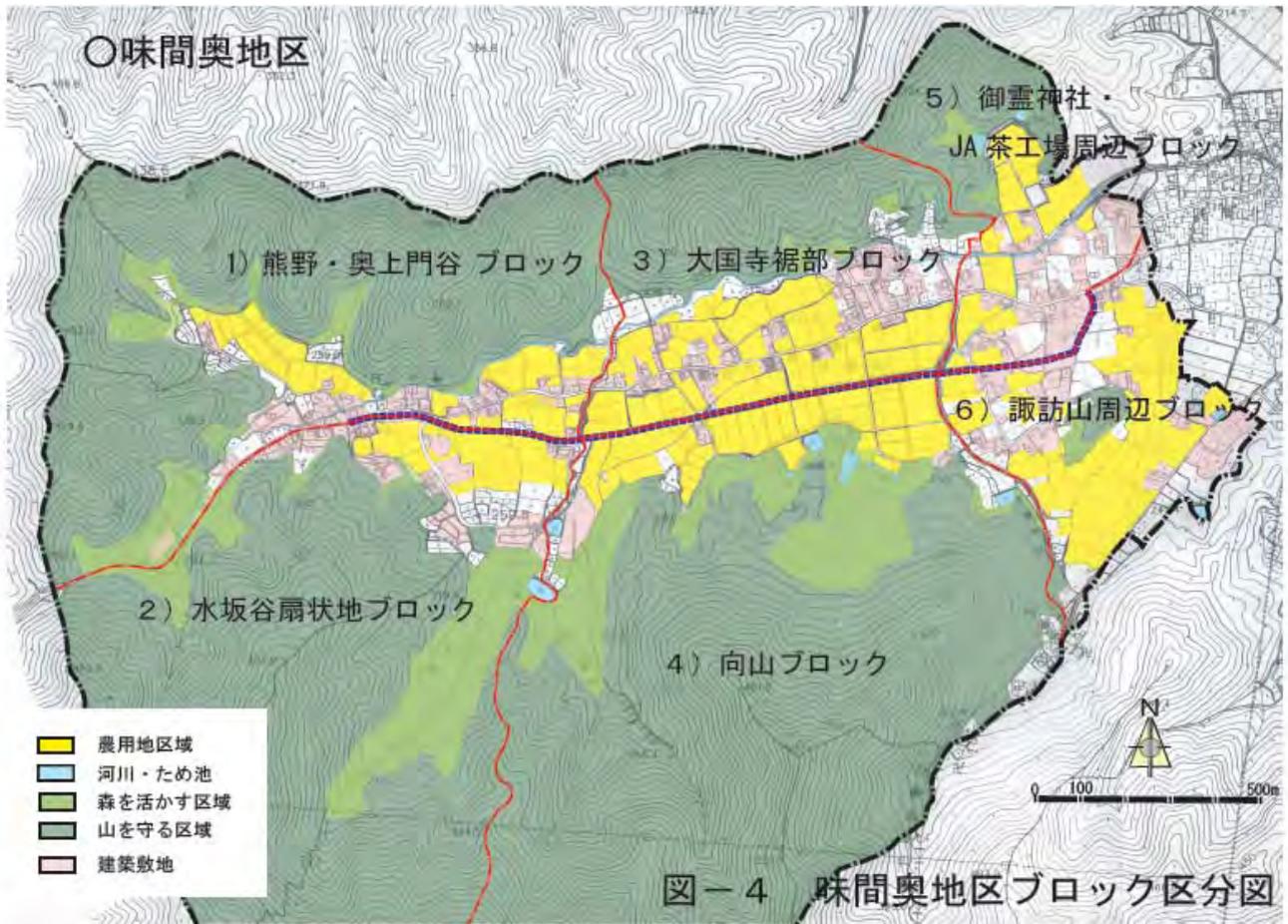


図-4 幹線道路（西脇篠山線）と谷川（南北）による味間奥地区の6つのブロック区分



阿草道から山裾の小峠川まで短冊形の敷地割を基本に家屋が形成されている。



短冊形の敷地は全て同じ名字の家屋で構成され、阿草道沿いは古い家屋となっている場合が多い。



農地の区画も阿草道（写真手前）から山裾の小峠川までの短冊区画となっている。



旧奥村の家屋は、阿草道から山裾の小峠川までの短冊敷地を基盤に土地利用が展開されている。

2) 水坂谷扇状地（やすらぎ園）の土地利用

- ・住吉川の扇状地に当たる領域で、「水坂谷」と呼ばれたように幾たびかの氾濫を経て土砂が堆積し、扇状地を形成した領域である。このため、近年まで家屋は立地せず、中世には高台の礫の多い原野として放置されていたのを土地の安定とため池築造に伴い近世、茶畑として利用し、江戸中期に今日のような一面茶畑となる土地利用を成したものとされる。
- ・西の山裾に牛舎のみが立地していたが、平成4年やすらぎ園の開設とともに県道から整備された（やすらぎ園への）アプローチ道路にそって JA の施設倉庫や宅地化が瞬く間に進んだ。すなわち高幅員の道路が整備されると、農用地であっても沿道開発が10年余で進むことを物語っており、道路計画時に沿道の土地利用や建築の誘導規制を考える必要がある。



緩やかな扇状地に味間奥を代表するまとまった茶畑が広がる。



扇状地を形成した谷川の住吉川沿いは今も竹林が覆っている。

3) 大国寺裾部の土地利用

- ・古刹大国寺を中心に集落構成された領域で、味間奥には珍しく大国寺の参道を利用して街区構成された住環境を形成している。阿草道と小峠川までの距離が拡大したため、半折型の農地敷地を基盤に家屋が立地したと想定され、阿草道沿いから家屋が立地し、参道沿いそして奥に家屋を配する必要性から裏道が形成され、今日の街区が形成されたと想定される。家屋の敷地割をよく見ると短冊形状は、変わっておらず、中世から江戸初期は、阿草道の北側沿道のみ家屋が立地し、向山の新田開発とともに阿草道の南側家屋が立地したものと想定される。南側家屋の立地する農地基盤は、短冊形ながら、家屋は、間口を広くし、奥行きを短くしており、これは農地が先に形成され、その後沿道に沿って宅地化したことを物語っている。



西脇篠山線のバイパスから望む大国寺裾部。阿草道に沿って家屋が帯状に立地する。大地は山裾の住吉川沿いに向かって傾斜していることが解る。



西脇篠山線バイパスから望む大国寺裾部。建物の基礎部が畦によって消え、建物の低層感が強調されている。



大地に根ざした印象となり、壁面よりも屋根の形状がより大切となる。



阿草道から茶畑越しに望む大国寺裾部。大国寺の位置する谷筋の参道に沿って家屋が連なり、阿草道と並行する街路によって味間奥には珍しい街区を一部構成し基礎部は見え、壁面が目立たない。



阿草道から大国寺裾部まで、約四軒分の奥行きがあり、二軒分の間に阿草道と並行する裏道が位置する。東に向かって傾斜しているため、西側から見ても建物の低層感が強調されている。



大国寺の参道。家屋間に農地が介在し、道を挟んで玄関部が正面に位置せず互い違いになっている。



阿草道と平行する街路（農道）。家屋が位置する街区は、参道沿いの一面で、後は裏道の農道となっている。農地は東に向かって傾斜していることがよく解る。

4) 向山の土地利用

- ・住吉川と文保寺川の間には挟まれた山裾平地の領域で、元来水利が悪く、近世まで、原野や畑地・栗林等として利用されてきた領域である。現在も家屋は一軒もなく、新しく整備されたバイパス沿いに建設された家屋が見られるのみである。戦国から江戸前期のため池築造により開墾された領域で、近世の新田として開墾・利用され、昭和61年に圃場整備され、大半が水田地として利用されている農用地である。



江戸期山裾に築造された石積みの向山池。

- ・現在住吉川沿いにバイパス整備に伴う工場の移転が検討されており、新しいバイパス沿いの農地の中に位置する施設として、景観形成の先導的役割を担う施設と位置付け、今後の味間奥地区の景観に配慮した施設デザインの在り方(方向性)を示す(里づくり計画地区にふさわしい)象徴的施設として、地域協議を重ね、学習しあいながら周囲の田園と調和した施設を整備する必要がある。



向山の白池池畔からの眺望。裾部に棚田が残るが大半は圃場整備された農地が広がる。



向山池裾部より大国寺方面を眺望する。一面に広がる農地は北に向かって傾斜していることがよく解かる。

5) 御霊神社・JA 茶工場周辺(源左衛門分)の土地利用

- ・波多野源左衛門分と称された領域であり、阿草道の両側に家屋が立地し、味間奥地区で唯一沿道市街地的なたたずまいを形成している。北向き地蔵は阿草道のアイストップに位置するサイン神と思われることから家屋は、北向き地蔵を結界に西側の阿草道に沿って北側から立地したと想定される。西に至るほど宅地の間口が大きくなり、中門造りや長屋門が見られることから、家老等の身分の高い侍を西側とし、東側に家臣団の屋敷を配したと想定される。近世に分村し、阿草道の往来が増えるに従い南側にも家屋が張り付き、今日の市街化形成に結びついたものと想われるが、家屋が沿道に沿って連但したのは、戦後になってからであろう。北側の家屋ほど、短冊敷地が継承されている。
- ・住吉川北側の区域には、山裾部に波多野秀治の墓地をはじめ、御霊神社や満願寺跡など、波多野家にちなむものが多く、恐らく波多野家の家臣が土豪化する時、ため池を築造し開墾した農地と思われる。今も住吉川北側に立地する数軒の家屋は、いずれも波多野姓となっている。



茶畑越しに望む源左衛門分の家屋群。中小の事業所や店舗が混在した街区を構成している。



味間奥の玄関部に位置する諏訪園の店舗。ひとつの店舗というよりも茶の里の象徴的施設の一つとして、ランドマーク性は極めて高い。

6) 諏訪山(扇状地)周辺の土地利用

- ・文保寺川の扇状地に当たる領域で、古代～中世に何度かの氾濫を経て土砂が堆積し、諏訪山周囲まで扇状地を形成したと思われる。文保寺川は水量が多く、山の稜線が突き出た東側は早くから土地が安定したため、白髪岳への登山道が形成され、山岳尾根の厳しさが法道仙人の文保寺

開基につながり、修験道として高仙寺山とともに一大聖地を形成したと思われる。文保寺川の流路標高と水の豊富さから、扇状地は荘園形成とともに農地として開墾されたと想定される。近年二村神社と文保寺に至る参道沿いに新興住宅地が見られ始め、ハレの祭り(祭礼)にのぼり旗が立つ沿道空間であることを踏まえ、適切な開発誘導が期待される領域である。

- ・諏訪山周囲から北側は、諏訪山が防波堤のように位置したため、水掛が悪く中世には小規模な畑地や栗林も分布したが、原野も多く存在したと思われ、近世になり、今日のような一面に広がる茶畑が形成されたと想定される。現在の茶工場も、諏訪山裾部に等高線にそって半弧を描くように立地し、茶畑を特徴づけている。
- ・バイパス整備に伴い沿道開発が、懸念される領域であり、保全すべき茶畑(農地)と活用すべき沿道地を明確化する必要がある。なお、緑の田園地の中に浮かぶ諏訪山周辺の風景は、美しく、住民にも親しまれている田園風景であり、バイパス等から東を望めば、波多野家の居城であった丹波富士の高城山(城址)が眺望できる領域である。この眺望性に留意する必要がある。



文保寺川の谷筋から諏訪山を望む。諏訪山までの扇状地は農地に開墾されている。



西脇篠山線のバイパスから茶畑越しに丹波富士の高城山を望む。諏訪山から北側には茶畑が広がっている。



諏訪山裾部に散居状に分布する家屋。離れや蔵を有し、門塀に囲まれた農村家屋となっている。



諏訪山裾部から源左衛門分を望む。実った稲穂によって家屋の屋根面のみが眺望される形になる。



二村神社参道沿いの新興住宅地。文保寺川流域のため池の灌漑領域で、江戸期開墾されたため、土地所有は下流の味間南地区が多く、その分関心が低くなり、開発されやすい状況となっている。



新興住宅地は、接道道路を引き込んだ袋小路型の開発で、市街地と同じ手法で行われている。

3. 味間奥地区の土地利用及び景観的特性（まとめ）

■味間奥の開拓史が偲ばれる土地利用

6つのブロック別に見てきたように味間奥地区は、灌漑の水系単位に開墾され、農業水利の整備の歴史が、味間奥地区の開拓史となっているのが特徴的である。

すなわち古代～中世初期は、

- ① 地区の北側に当たる山裾を流化する小峠川～住吉川の谷川を利用して、まず開墾され数軒の家屋が谷川沿いの微高地に散居状に立地し、短冊形敷地基盤の原型を構成する。

その後

- ② 文保寺の開基や大国寺の建立を経て、小峠を越えて阿草に至る峠道が形成され、文保寺から高仙寺山に至る修験道のにぎわいとともに入家が大国寺を中心とする阿草道沿いに少しずつ増加し、
- ③ 修験の影響を受けて山際の結界として熊野神社を建立し、奥村の垣内集落が形成され、二村神社の分祠へとつながった。

戦国期に

- ④ 高城山の落城とともに波多野氏一族が土農化して住みつき、波多野氏を中心とする北側のため池築造による開墾によって源左衛門分を形成したと思われる。

近世になり、

- ⑤ 水掛の悪い住吉川と文保寺川の扇状地が徐々に畑地や茶畑として利用されるようになり、
- ⑥ 向山のため池築造による新田開発によって、江戸初期にほぼ今日の味間奥の土地利用基盤が形成され、源左衛門分と文保寺分を合わせて味間奥村が形成された

と想定される。

味間や大沢の平地部の新田開発に伴い、茶の主産地は真南条等から山間地の味間奥や味間北へ移動し、茶が換金作物として注目される江戸中期には、今日のような茶の一大生産地を形成したと思われる。味間奥の扇状地の茶畑は、礫の多い地味の瘠せた土壌を何年もかけて今日の茶畑として育て上げたもので、先人の汗の結晶として今日の茶所を成したといえる。

味間奥地区は、貨幣経済が進展する江戸中期から、茶栽培と丹波杜氏の隆盛によって財を成したと思われ、一部沿道に家屋が連なるのはこのころからと思われ、今日の裕福な里の情景に結びついて

いる。

このような味間奥の開拓史が、現況の土地利用から窺い知ることができる点が、味間奥の土地利用の大きな特徴であり、裏を返せばいかに地勢に応じて順応に集約的土地利用を展開してきたかをよく物語っているといえる。

■短冊形敷地基盤を基礎とした集落散居のたたずまい

阿草道に沿って散居状に立地する家屋は、山裾を流化する谷川の小峠川までの南北に長い短冊敷地を基盤に敷地形成されている。すなわち味間奥の家屋敷地は、農地を基盤とした短冊敷地を原単位として家屋が立地しており、農地が開墾された後徐々に阿草道沿いに家屋が散居状に立地していったことを物語っている。

■家屋間に介在する農地

阿草道沿いの家屋は、両側町を構成することなく散居状に分布し、家屋間に農地が介在することによってゆとりある敷地にゆったりとした味間奥のたたずまいを構成している。家屋周りの水掛の悪いへた地は、自家用の菜園畠に利用されており、緑の多いゆとりある敷地基盤を成している。新しく建設された家屋の庭にも菜園等が家屋周りやカーポート周りに設けられている場合も多く、こうした家屋周りの土地利用は、味間奥のゆとりある敷地がもたらしたものと見える。



家屋間に介在する農地。ゆったりとした佇まいとなる。



新しい住宅敷地にも写真手前のような菜園が設けられている。

■高低差を活かした家屋の立地（地勢の尊重）

家屋の立地する敷地は、味間奥の北と東へ傾斜する敷地の高低差をたくみに吸収するように形成されており、平坦地を大きく造成するのではなく、必要最小限とし、地形の起伏や高低差をうまく活かして敷地造成されている。このため味間奥の家屋は、大地に根ざした印象を強く与えるひとつの要因となっている。

■農村家屋の奥集落と武家屋敷の面影残す波多野源左衛門分の家屋のデザイン

一般に散居の集落家屋は、セキュリティの面から門塀を有し、母屋を中心に独立性が高い家屋が多く、味間奥の家屋も大半が、門塀や戌亥倉を有する敷地周りを囲われた屋敷となっている。ただし、農村集落である熊野神社周りの奥集落と波多野氏の源左衛門分に位置する家屋は、大きく形態が異なり、源左衛門分の家屋は、武家屋敷に多い中門造りや長屋門が見られるのに対し、奥集落では全く見られず、塀や生垣には囲まれているものの、豪壮な門は皆無であり、いわゆる農村の生活庭を鑑賞的に囲んだものが多い。味間奥のような農村部の散居集落で、城下町のように農村家屋と武家屋敷のような家屋が明確に領域区分され立地するのは、篠山市の中で味間奥が唯一であり、味間奥の土地利用の歴史がもたらした家屋景観ということができる。

なお、味間奥の民家は、播磨と同じ平入りが大半であり、いわゆる撰丹型の妻入り民家は、全く立地していない。また諏訪園の店舗が位置する味間奥の玄関部では、接道庭を有さない町家型の家屋も一部見られる。これらは近世末以降に立地したものと想定される。



敷地基盤の高低差を活かして立地する家屋。



長屋門を有する中門造りの家屋（源左衛門分）。

■家屋を柔らかく包む緑の外皮

味間奥の家屋の大半は、豊かな緑に囲まれている。特に農家の奥集落でその傾向が強い。家屋の周囲を覆う緑は、農作業の生活庭から鑑賞庭へと変化する過程で、庭木として植栽されたものも多いが、よく見ると裏庭や畦際の畦畔木が庭木と一体となって構成しているものも多い。すなわち、家屋周りの菜園畠や家屋間に介在する農地の畦畔木が、継承され、庭木と一体となったもので、生垣の外に接するように角地等に植栽されている大きな樹木や裏庭のカキノキやクリの木は、農地際に植栽されていた樹木が大切に保全され、成長し、庭木と一体となって家屋を柔らかく包む豊かな緑を構成しているものと言える。すなわち味間奥地区特有のゆとりある敷地と介在する農地によって構成された住民にも親しみのある多様な緑ということができる。この家屋をやさしく包む緑によって建物が目立たない味間奥特有の緑豊かな家屋景観が形成され、茶畑等の田園越しに眺望する時、谷筋を構成する山なみを背景に扇状地を形成した住吉川や文保寺川の竹林や諏訪山とともに緑豊かな田園風景が構成されている。



家屋の敷地際に残るムクノ古木と稲かけの畦畔木。



屋敷地の角の大木のカキノキと庭木の緑。カキノキはかつて菜園畠の敷地際に植栽されたもの。

■四季を彩る畑地の畦畔木等の多様な緑と清流の水辺

家屋をやさしく包む畦畔木等の多様な緑は、カキノキやクリノキ等に見られるように実のなる木や落葉樹といった四季を彩る緑が多く、季節感の演出に一役買っている。畑地の作物とともに集落に四季の変化を伝える要素となり、大国寺の紅葉とともにこの彩る緑が、常緑の生垣や茶畑の帯、そして背景の緑の山並みとのコントラストを醸し出し、味間奥の景観をより豊かなものになっている。

また住吉川等の谷川は、水量は乏しいものの最上流の水源地にふさわしく、透明度の高い清流であり、水を蓄えるため池とともに比較的きれいな水辺を形成している。春には棚田や急こう配の水路を流れるせせらぎの音が田園のあちこちにこだまし、茶摘みが始まる初夏の夕にはホタルが飛び交う。水にきらめく水田と五月女の茶畑、首を垂れる黄金の稲穂と緑の帯の茶畑、そこに水音や竹の葉音に生き物が加わる味間奥の田園風景は、他地域以上に四季の変化に富んだ豊かな憧憬を演出している。



住吉川沿いに分布する竹林。家屋を分節化し背景の里山の緑とのコントラストをつくり出している。



家屋間に介在する畑地際に残る稲木の畦畔木。



茶畑に残る落葉のカキノキとのコントラスト。



家屋の裏手で色づくカキノキ。



茶畑のカキノキと背後の竹林が重なり合う。



池畔は生き物たちの集う草地空間となっている。

■田園景観を分断する工場や事業所倉庫

こうした豊かな緑に対し、立地する工場や事業所倉庫の大半は、何ら修景されていない。緑の田園を引き裂くように人工的な施設や大規模な駐車場がむき出しで、田園地を分断したように立地している。特に規模の大きい施設や農村景観に理解あるはずの農協施設や茶畑周囲に点在する茶工場などが修景整備されていない点は問題である。茶畑が広がり、四季の変化が豊かな味間奥の田園ならではの修景整備が期待される。



茶畑の中に無造作に立地する茶工場。



工場や事業所・倉庫等は、何も修景は行われていない。

■新興する住宅地

近年、味間奥地区にも新興住宅地が見られ始めている。市街地と同様に袋小路の接道街路の左右に 7~8軒余の宅地を配した建売住宅であり、先述の工場同様周りに広がる田園景観には全く修景的配慮はなされていない。集落地に見られる家屋を柔らかく包む緑の修景を学びながら、味間奥地区にふさわしい田園の眺望景観に配慮した修景整備を図る必要がある。



立地し始めた集落郊外の新興住宅地

4. 人口・世帯数

旧丹南町域の人口は、終戦直後の昭和25年をピークに減少し、高度成長期の昭和50年には2717世帯で10955人まで減少している。世帯数がほぼ横ばいであるのに比べ、人口減少が大きいのは、高度成長期の若者流出による核家族化と出生率の低下によるものである。昭和50年から増加に転じるが、音羽グリーンタウンや住吉台の住宅開発によるもので、篠山駅周辺周辺の市街地中心部に偏在しており、農村部は過疎化する中で、旧町全体としては微増するといった中山間地域特有の人口動態となっている。

味間奥地区も年度によって増減はあるもののほぼ旧丹南町と同じ経過を辿り、平成2年頃から再び増加に転じ、近年微減傾向となり、平成17年には480人、124世帯となっている。近年のバイパス整備等に伴い、宅地化が予想されることから、今後は5年間で約20人前後の微増傾向に転じるものと予想される。これは1世帯2.5人として10軒前後の新興住宅地が立地する数値である。

地区の人口密度は1.22人/ha、山林、農地と住吉川等の水面を除けば9.67人/ha、これは良好な住宅地である旧第一種住居専用区域と同等の人口密度の数値である。高齢者比率は、地区内の老人ホームを除けば29.4%と篠山市をやや上回り、年少比率も県や篠山市を下まわっていることから、少子高齢化が徐々に進行しているといえる。

表－3 味間奥地区の人口・世帯数の推移

	1891年 (明治24)	1960年 (昭和35)	1975年 (昭和50)	1980年 (昭和55)	1985年 (昭和60)	1990年 (平成2)	1995年 (平成7)	2000年 (平成12)	2005年 (平成17)	増減	増減率
世帯数	112	100	106	112	112(1)	116	165(2)	180	124	18	16.9
人口	454	505	433	455	419(7)	443	455(2)	489	480	47	10.8

※ () は外国人居住者、全体には含めていない。増減は30年間比較

表－4 味間奥地区の人口比率一覧 (H17国勢調査)

	人口密度 (人/km ²)	高齢者比率 (%)	年少比率(%)	出生率(%)	高齢夫婦世帯 率(%)	高齢単身世帯 率(%)
全 国	337	20.1	13.9	1.26	9.1	7.9
兵庫県	666.0	19.8	14.2	1.25	9.9	7.5
篠山市	119.8	26.5	14.0	1.31	12.2	9.5
味間区域	507.7	17.8	14.6	—	7.0	4.6
味間奥地区	122.1	40.0(29.4)	11.5	—	7.3	8.9

※ () は特別養護老人ホーム やすらぎ園を除いた数値



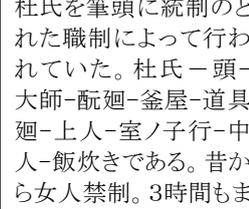
沿道沿いに新しい住宅地が立地しはじめている。

5. 文化財等の歴史的資源

味間奥地区のワークショップを通して確認された味間奥地区を特徴付ける社寺や道標などの史跡や文化財、逸話の残る地名等の歴史的資源として、以下のものがあげられる。

表－5 味間奥地区の歴史文化資源

NO.	歴史資源	内 容	伝 承 等	備考
①	 <p>大国寺 (本堂： 室町初期 創建)</p>	<p>天台宗、安泰山。開山、空鉢仙人。大化年間(645～650)開創。正和年間(1312～1317)花園天皇が帰依して、源寺号とし伽藍を再建。当地で最も古い寺といわれ、天正年中(1573～91)織田信長の命を受けた明智光秀の兵火により全焼。その際に僧侶が仏像を山から下ろし仏像は焼失しなかったと伝えられる。豊臣秀吉や代々の篠山城主の崇敬を受けた。元禄8年(1695)疫病が流行したことから、現在地に仏像を安置し再興。後に、清鑑を開山として曹洞宗に改宗した。本堂は唐風と和風の折衷式で、大日如来坐像(藤原時代中期・薬師如来として安置)胎藏界大日如来坐像(藤原時代後期)、阿弥陀如来坐像(藤原時代後期)、持国天・多聞天立像(藤原時代後期)が安置され、本堂と共に国指定重要文化財になっている。多数の文化財の仏像を安置することから「丹波の正倉院」呼ばれている。(他に、十一面観音、兜跋毘沙門天、吉祥天等がある)</p>	<p>同寺には満願寺の本尊阿弥陀如来坐像(木造)が合祀されている。満願寺は波多野秀治供養のため子孫が建立した寺で明治以後廃寺となり、仏像は大国寺に移され保管されている。</p>	
②	 <p>二村神社</p>	<p>味間谷7か村の総社。文明14年(1482)見内の二村神社と座争いによって御輿を持ち帰り、西古佐の字神輿谷に仮安置し、その後現在の味間奥松本に神域を定めた。 二村の由来は古代式内社として二村で祀られたことによる。 境内には、三社神社として諏訪神社、春日神社、八幡神社、天満神社、稲荷神社、嶋姫神社を合祀する。 丹波志によれば元来味間の総社は住吉神社であった。見内からの分社は、主殿保(当野)の荘郷地頭の酒井氏の勢力伸長によるものとも云われている。</p>	<p>座争い時、西古佐の河南小柴が金幣を神輿に入れ持ち帰ろうとし、波賀野で他村と奪い合い、小柴は先棒を一人で担ぎ、途中味間の者が後棒を担いだ。このため祭り神輿の先棒は西古佐、後棒は味間が担ぐ。</p>	
③	 <p>文保寺</p>	<p>聖備山長流寺と称し、大化元年(645)法道仙人により開基。本尊に自作の聖観世音菩薩を安置したとされる。最盛期堂舎は、自光院、龍花院、真如院、観明院、源智坊、行定坊、一乗院、吉祥坊、西教坊、常光坊、中蔵坊、教蔵坊、善光坊、宝住坊、本性坊、泉蔵坊、山本坊、極楽坊、持正坊、理教坊等の21坊を数えた。天歴の乱で堂舎は全て焼失し、正和年間に慈覚大師作の千手観世音菩薩を安置し再興、文保年間松尾山文保寺と改め、その後堂舎も整備されるが、光秀の丹波攻めで、再び灰塵と帰した。江戸中期に復興され、6カ院となり、現在は、真如院・観明院・大勝院の三院が残る。本堂の観音堂に秘仏、木造聖観世音菩薩坐像と木造千手観世音菩薩立像が祀られている。山内の真如院一木造阿弥陀如来立像、大勝院一木造十一面観世音菩薩立像、観明院一木造阿弥陀三尊立像が祀られている。当寺の古文書に天正17年の豊臣秀吉の朱印状がある。 文保寺楼門(仁王門)は、元中2年(1385)建立され、戦火により焼失後、天正末鎌倉の建長寺を模して再建されたもので、篠山市の指定文化財。上層部に再建当時の部材が残り、彩色の跡がみられる。安置されている金剛力士像はいずれも江戸時代の作といわれている。</p>	<p>法道仙人は、松尾山の山頂仙人岩で修法し聖観音を刻し、景行天皇に命じて伽藍を建立させ、長流寺と名付けた。伽藍は天歴(947～57)に焼失し、本尊は飛来した老翁(空鉢仙人)の鉢に乗って本庄(今田)の山内に収められ、後に獵師に発見され、山麓の堂に祀られた。花園天皇の命で文保元年再建、本庄から本尊を請けて祀り、山回りの行者を立て、遠近の峰々を周り日月諸天を勧請する等の行法を行ったと伝えられる。</p>	<p>楼門、木造十一面観世音菩薩立像は篠山市指定文化財</p>
④	 <p>御霊神社</p>	<p>波多野秀治の慰霊を祭った神社。杉林の山中に小さな祠があり、尾根を越えた所に波多野秀治の墓や辞世(よりわかる心の闇に迷わねばいで物見せん後の世にこそ)の石碑がある。地元では「ごりょうさん」と親しみを込めて呼び、昔は12月8日が祭礼。現在は12月の第一日曜日となっている。秀治の次男勘蔵(源左衛門定吉)は、明暦年間(1655～57)波多野秀治を祭神とする御霊神社(丹波神社)を建立し、波多野源左衛門分の氏神とした。</p>	<p>現在の小祠は、弘化年間(1844～47)に住民が自力で再建したものである。 12月22日には荷重双というお参りがある。</p>	

⑤	熊野神社	追入の聖権現や宇士の熊野神社と同じ熊野三山の流れを組む。熊野信仰は、平安時代以後貴族や武士の信仰を集め、御師や熊野比丘尼によって各地に伝えられた。この熊野信仰の丹波の窓口の一つが、山南岩屋の石龕寺で、丹波における熊野修験の拠点成し、多くの山伏が生活していた。		
⑥	大乘寺	法道仙人により開基したと伝えられる。人家から離れ山裾にひっそりと立地している。		
⑦	(字) 金剛寺	味間奥の小字名として残る。かつて寺院があったとされている。		
⑧	満願寺址	波多野秀治を供養するため、波多野源左衛門定吉が建立した寺院跡地。		
⑨	波多野秀治の墓	八上城落城から200年後に建立されたと伝えられる。波多野家の人たちが住みついた味間奥にふさわしく、御霊神社のすぐそばに建立されている。		
⑩	波多野家の屋敷跡 (長屋門)	長屋門は約 225 年前、八上城落城から 200 年を経て天明年間(1781-89)頃に建立された。高城山から移植されたというマツと共に数代耐えた隠棲生活後 200 年……味間の地に丸に十字の家紋の入った波多野氏の長屋門が造られた。それから 220 年余り、八上落城を語る樹齢 425 年の松の木とともに味間奥の地で、ひっそりと継承されています。茶畑越しに遠望される丹波富士の高城山を波多野家ゆかりの源左衛門分の人々はどんな思いで眺めていたのでしょうか…。		
⑪	北向地蔵	町家街の裏手に位置する。源左衛門分のサイノ神と想定され、今も集落の入口部にあって、地域を守っているといえる。		
⑫	行者地蔵	修験地にふさわしく修行僧が建立したと伝えられる小祠。		
⑬	地蔵	熊野園前にお地蔵さん。比較的新しく、水子供養のために祀った地蔵堂と思われる。		
⑭	小峠地蔵	今から500年ほど前、参勤交代の時、この丹波路から播州方面へ向かう行列が、小峠にさしかかった時、高官が病にかかり、手当てのまいなく他界した。哀れに思った住民が祀ったのが小峠地蔵といわれている。現在地元では、願いは何でもかなえてくださる諸願成就の地蔵として知られ、道行く人達の信仰を集めている。峠のサイノ神である。なお、過去3回道路拡張により移設され、今日に至る。(田中英夫)		
⑮	丹波杜氏	酒造出稼ぎは、冬の農閑期にでき、作業衣以外さしたる必要もなく、他の余業に比べ賃銭が高く、しかも丹波は酒造地の伊丹や池田、灘に近かったため、江戸中期の享保(1716~35)の頃から盛んに行われ郡内で2千数百人、最盛期には五千人にも及んだ。百日稼ぎと称し、秋の彼岸ら春の彼岸ごろまで行われ、杜氏、脇杜氏は夏作業も30日間にかぎり許可された。明治以降も数千人の蔵人が酒造地へ出稼ぎ、腕がよく勤勉で統制のとれた「丹波杜氏」の名声を博し、郡内の農家経済に大きく貢献した。明治27年多紀郡酒造出稼人組合が組織され、同38年「多紀郡醸酒業組合」となり、明治末から大正期に丹波杜氏は黄金時代を迎え、味間村からは毎年 250~350人の酒造出稼ぎ者が記録された。戦後復興した昭和31年には丹波杜氏組合が発足したが、高度成長とともに四季醸造化と機械化が進み、農業崩壊による若い後継者不足も手伝い現在篠山市の杜氏は30人弱となっている。	 (丹波酒造唄保存会)	酒造りは、総元締め杜氏を筆頭に統制のとれた職制によって行われていた。杜氏一頭-大師-配廻-釜屋-道具廻-上人-室ノ子行-中人-飯炊きである。昔から女人禁制。3時間もまとめて寝る間もなく、身を切る冷たい水で白米を素足で研ぐ「寒い」「眠い」「煙い」夜中起き辛い仕事である。

⑩	茶 (茶の由来)	<p>「日本後記」「類聚国史」によれば、我が国のお茶の記録は、850年、広仁6年4月嵯峨天皇が近江国滋賀韓崎の梵釈寺に行幸した時、崇福寺大僧都永忠が茶を煎じて献じたのが最初。平安初期には畿内を中心に丹波でも茶の生産が行われていたとされている。広仁6年6月、畿内の近江、丹波、播磨などの国々に茶を植え、丹波国は朝廷に毎年献じていたと記録にある。当時茶は献上及び寺院への献茶や薬用として利用された。茶の栽培が一般化するの鎌倉時代、京を中心に栽培圏が広まり、喫茶が一般化されるのは室町時代である。多紀郡の茶の初見は16世紀初頭波多野元清の請取状である。文保寺には文保寺の茶役を公儀の役から免じた「豊臣秀吉免許状」が残っている。江戸時代には篠山藩の特産物として大阪へ出荷され、藩の収入の多くを占め、江戸後期の文政8(1885)年、篠山藩領では現在の四倍以上に当たる三百数十haで栽培していた。大阪で流通する茶の半分の量を丹波で生産していた。丹波茶は祖先の技法とその伝統を受け継ぎ、兵庫県の代表的産物として各地に出荷され、現在も県下のお茶の生産量の70%を占めている。丹波茶の主産地味間は標高200mの丹波高原の山峡であり、我が国で最も気温の低いお茶の栽培地域として知られている。</p>	<p>丹波の山峡は県下で最も夏の日照時間が短く、日々の気温差も大きいため秋から初冬には深い霧で包まれる。この日照時間と霧が茶葉に降り注ぐ太陽の強い日差しを抑制し、うまみ成分テアニンを保護し渋み成分タンニンへの変化を抑制する。丹波茶はうまみ成分テアニンを多く含み昔からおいしいお茶として愛されている。</p>	
⑪	奥右衛門谷	<p>奥右衛門さんによって開墾された谷筋として伝えられる。文献では、今から20台前に住みつき開墾したとされるが、地元では、江戸初期に入植した伝承されている。真新しい砂防ダムが位置する水源地で、谷川の水も豊富で、熊野神社境内と共にホテルの生息地としても知られる。</p>		
⑫	諏訪腰経塚	<p>経塚とは、経典を埋納した施設のこと。10世紀ごろから盛んにおこなわれた。標高240mの独立丘上に径8mの円形盛り土があり、その上に長さ7m、幅1.1mの石が並んでいる。扁平な石で三方を囲んだ祠があり、この経塚から鉄製の経筒破片、甕、鎌倉期の山吹蝶鳥文鏡が発見されている。文保寺にかかわる経塚といわれている。</p>	<p>文保寺の北東500mの所に位置し、丘の南に文保寺住職の墓がある。</p>	
⑬	山の神	<p>登山道沿いの樹木を御神体とし、毎年1月山の神開きが催されている。</p>		
⑭	金山	<p>黄鉄鋼や、銅・銀を産した鉱山跡。含有量は少なかったと伝えられる。花木等を植栽したミニ公園の奥に位置する。</p>		



紅葉の名所：大國寺



文保寺の参道の特徴づける仁王門



唐門の大勝院（文保寺）



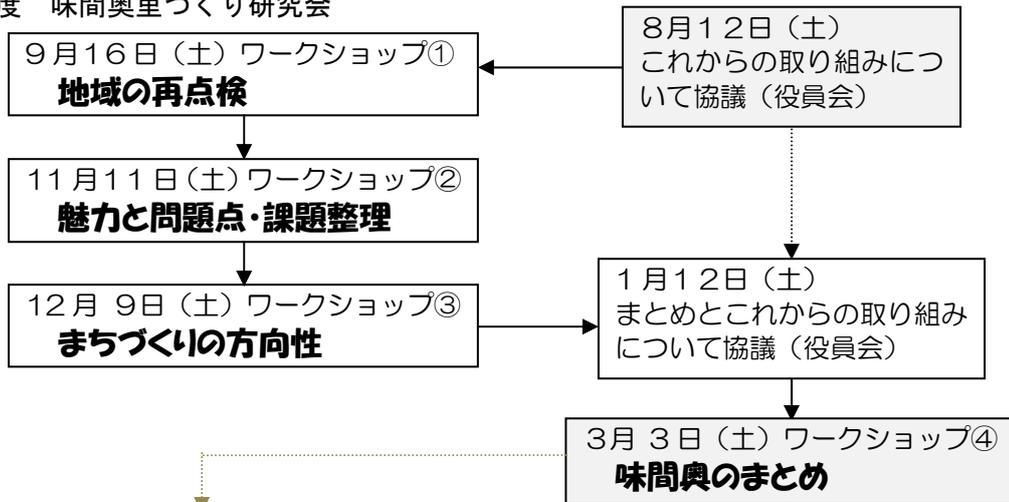
27回目を迎えた6月の「大國寺と丹波茶まつり」

6. 味間奥地区の魅力と問題点・課題（ワークショップ等から）

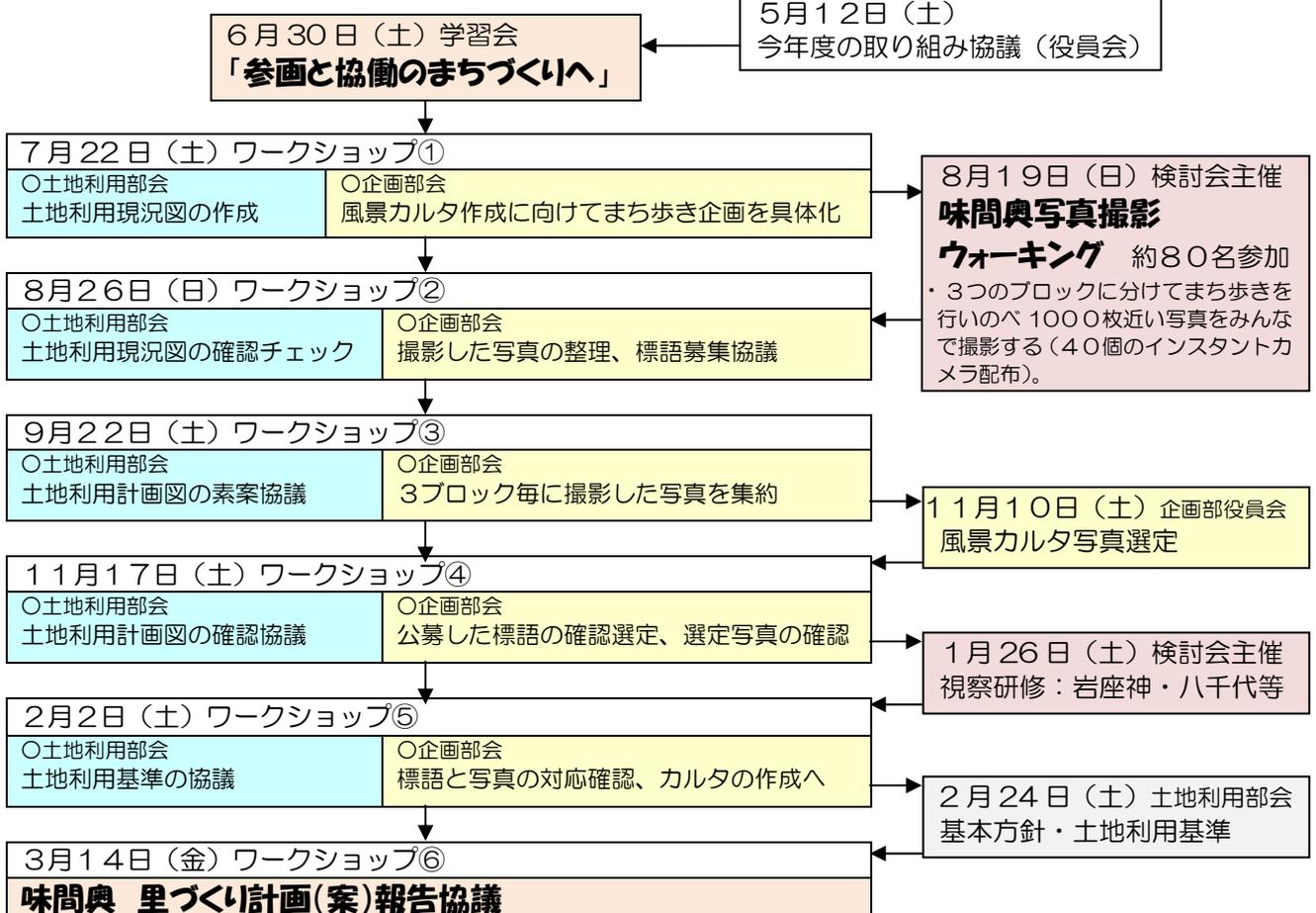
味間奥地区の魅力と問題点と課題については、味間奥自治会が設置した「味間奥里づくり研究会」主催のワークショップをのべ2年間に渡って10回程度開催し、参加者で意識を共有し合いながら確認・協議してきた。初年度の2006年度は里づくり計画について学習しあいながら、5回のワークショップを行い表一にまとめた味間奥地区の魅力と問題点・課題を抽出してきた。2007年度は、味間奥里づくり研究会を策定に向けて取り組む「味間奥里づくり検討会」として新たに自治会内に組織化し、土地利用部会と企画部会に分け、下記フローに沿ってワークショップを開催し、県の緑条例に基づく土地利用計画とパワーアップ事業申請に基づく風景カルタづくりを行ってきた。

■ワークショップの開催（味間奥）

○2006年度 味間奥里づくり研究会



○2007年度 味間奥里づくり検討会



○風景カルタづくりー企画部会

風景カルタづくりは、里づくり計画作業で撮影する地域の魅力的な景観写真を絵柄として読み札に当たる標語を地域で募集し、パワーアップ事業予算でカルタ制作を行うものである。幅広い住民参加で里づくりの計画機運を盛り上げ、里づくり計画への関心を促すと同時に老若男女の参画の基に地域景観や風景の写真撮影をおこない、単に計画づくりの作業写真に終わらず、風景カルタとして地域の新たな財産にするものである。具体的には里づくり研究会主催のまち歩きを行い、使い捨てカメラを参加者に手渡し、味間奥の魅力的な風景を自由に撮影してもらい、撮影箇所等を地図にプロットし、魅力的な風景の視点場抽出等の景観分析を行うと同時に自治会の俳句の会の協力を得て住民に標語を募集し、読み札を写真と対応するように選出し、カルタを作成しようとするものである。

総数約 650 枚の住民が撮影した写真が集まり、45 枚の写真が絵柄やカルタ解説の表紙等に選出され、読み札となる標語は、38 首集まり、「あ〜わ」までの44 首が風景写真に対応して選ばれた。その最終結果は、表-10 及びP33~P38 のカルタ絵柄写真(最終)に示す通りである。また住民が風景として評価の高かった主要な視点場は、図-6にまとめたとおりである。

なお、土地利用部会でチェックしあい、検討してきた土地利用計画の内容は、本書の第3章にまとめられている。

○ワークショップの開催風景



2年間のべ10回行われたワークショップ。



深夜まで熱心な協議が続いた。



2007年8月19日夏休みを利用して行われた味間奥「写真撮影ウォーク」。老若男女80名が参加した。



2008年1月視察研修として岩座神等を訪問。

表-6 味間奥地区の魅力

(2006年度ワークショップから)

	集落家屋	大国寺 等社寺	農地		山地	
			茶畑	農地	里山	奥山
自然	<ul style="list-style-type: none"> ・空気がおいしい、きれい4 ・静かでのんびり ・自然がいっぱい 		<ul style="list-style-type: none"> ・空気 ・静か ・自然 		<ul style="list-style-type: none"> ・緑が多い2 ・水がきれい3 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・災害少ない4 ・台風少ない ・地質が硬い ・風光明媚 ・日当たりがよい 		<ul style="list-style-type: none"> ・茶畑8 ・在来品種の茶畑 ・整備された茶畑 	<ul style="list-style-type: none"> ・田園風景 ・住吉川の清流 ・川 ・池 ・農地が整備されている 	<ul style="list-style-type: none"> ・山がある2 ・山が多い ・緑が多い2 ・大峠 ・栗林 ・林 	<ul style="list-style-type: none"> ・白髪岳4 ・雲海2 ・山林 ・山に向かってい ・白髪岳近い
生き物	<ul style="list-style-type: none"> ・夜の虫の声 			<ul style="list-style-type: none"> ・住吉川の蛍 ・ホタル、カガニ ・蛍の生息 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物との共存（イノシシ、タヌキ、キツネ等） ・動物の声 	
景観 (音・匂い)	<ul style="list-style-type: none"> ・茶工場のおい ・お墓のま ・まり 	<ul style="list-style-type: none"> ・大国寺4 ・大国寺の紅葉2 ・大国寺の鐘5 ・大国寺の桜 	<ul style="list-style-type: none"> ・茶畑7（ヤブキタ） ・お茶 ・緑の茶園 ・水坂からの眺め 	<ul style="list-style-type: none"> ・向山の奥に向か ・つての農道の雰 ・囲気 ・文保寺下方の構 ・造改善されてない ・田畑の景観 	<ul style="list-style-type: none"> ・大峠の展望4 ・美しい樹水 ・峠から見る夜 ・景 ・大峠から見る ・朝霧 	<ul style="list-style-type: none"> ・星空 ・白髪岳の山並 ・み ・山の景観 ・山河 ・松尾山系
食べ物 (特産)			<ul style="list-style-type: none"> ・昔ながらの番 ・茶（筵の上で揉 ・む） ・特産品のお茶 ・がある2 ・丹波茶2 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒大豆5 ・枝豆 ・季節の野菜2 ・コシヒカリ2 ・山の芋 	<ul style="list-style-type: none"> ・マツタケ ・松茸山2 ・金山（鉱山） ・3 	
交通	<ul style="list-style-type: none"> ・駅に近い4 ・交通の利便性 ・I.Cに近い3 ・バイパス ・道が整備されている 				<ul style="list-style-type: none"> ・山裾の野道が ・広い 	<ul style="list-style-type: none"> ・白髪岳山登山 ・コース
施設	<ul style="list-style-type: none"> ・茶の里会館3 ・やすらぎ園 ・下水道 ・集落の中に神社二つある 				<ul style="list-style-type: none"> ・三保寺霊園(奥 ・霊園)3 	
歴史	<ul style="list-style-type: none"> ・波多野家の ・屋敷跡2 ・スイ坂公園 ・丹波杜氏の ・里 	<ul style="list-style-type: none"> ・国宝（重文） ・大国寺22 ・二村神社2 ・御霊神社4 ・文保寺 	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史の古い茶 ・畑（日本後記） ・文保寺と茶の ・歴史 	<ul style="list-style-type: none"> ・オクウエモンダ ・この地名 	<ul style="list-style-type: none"> ・波多野秀治の ・墓3 ・満願寺址 ・熊野神社4 ・行者地藏2 	
祭り	<ul style="list-style-type: none"> ・納涼祭 	<ul style="list-style-type: none"> ・茶祭り6 ・秋祭り14 ・祭礼 ・二村神社祭2 		<ul style="list-style-type: none"> ・農業感謝祭3 		
イベント・活動 (組織)	<ul style="list-style-type: none"> ・敬老会2 ・村一体となった催し物 ・集落だより3 ・生涯学習(ゴルフ・クッキング・歩こう ・会)2 ・老人会 ・陶芸家ピーターさんがいる 			<ul style="list-style-type: none"> ・河川愛護活動 ・美化活動の継続 		
コミュニティ	<ul style="list-style-type: none"> ・近所づきあいがよい3 ・近所の親近感 ・素直で人がよい ・子供の非行が少ない ・子供たちのあいさつ ・後継者が多い ・北村と仲がよい 		<ul style="list-style-type: none"> ・皆仲がよい ・名前で呼び合う親近感 ・非閉鎖的 ・若者が多い2 ・転入者も村づきあいができる ・戸数が多い ・金持ちが多い 			<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会

表-7 味間奥の共有資源（ワークショップから）

	1班	2班	3班	4班
○訪れたい場所 美しい眺め	①大国寺 ②波多野家ゆかりの地 ③文保寺	①大国寺 ②大峠 ③茶畑	①大国寺 ②お茶 ③峠からの展望	①大国寺 ②山河 ③茶畑
○コミュニティを育む大切なもの	①秋祭り ②茶祭り ③近所づきあい	①祭り ②敬老会 ③生涯学習活動	①茶祭 ②人間関係 ③集落だより	①親近感 ②美化活動 ③集落だより
○子供たちに残したい環境	①自然 ②祭り ③茶畑	①田園風景 ②祭 ③新鮮農産物	①祭 ②水 ③自然	①茶畑のある風景 ②伝統文化 ③豊かな心
○味間奥のイメージ	自然・歴史ある茶の里味間奥	大国寺昔の心が残る里	歴史と自然の味間奥	豊山、豊水、豊かな心の味間奥

表-8 味間奥の問題点と課題（ワークショップから）

	集落家屋	大国寺 等社寺	農地		山地		
			茶畑	農地	里山	奥山	
変化	自然	・自然の中での子供の遊び減少			・川の清流常時流れていない ・田の水不足 ・川が汚い	・サルが出た	
	生き物	・川、溝に魚がいない		・昆虫がいなくなった	・獣防護策の設置は自然との共生の妨げ	・獣の害 2 ・害獣増加 2 ・鹿が出る ・イノシシが出る ・アライグマが増えた 2 ・獣が多い	
	土地利用	・無秩序開発 ・都市化による環境汚染		・茶畑の荒廃 7 ・お茶の管理 2	・農薬問題で野菜等が作りにくい ・田畑荒廃 2	・荒れていく山林 ・山が荒れている	
	技術			・荒地が多い 4 ・荒廃地が増えてきた 3		・森林の手入れ技術	
	社会現象	・少子化 4 ・子供が少ない 7 ・老人が多い 2 ・高齢化の進行 5 ・高齢者の一人暮らし増大 2 ・核家族化 ・不景気		・人手不足			
	人手	・子供の遊び声が少ない ・後とりが少ない家がある ・祭祀後継者不足 ・家の担い手不足 ・同じ隣保の人と会うこと少ない		・農業後継者不足 10 ・茶後継者不足			
	施設	・空き家の増加 2					



交流	・歴史を子供に伝える方法 ・地域内の交流少ない ・腹を割った話し合いの場少ない ・若者の意見が反映されない	・丹波茶知名度低い			
コミュニティ	・青年、壮年の参加者減少 ・集落行事への参加者の偏り ・近所づきあいの希薄化 ・共同作業助け合いの欠如 ・進まない共同化 ・協調性が薄い				

	集落家屋	大国寺 等社寺	農地		山地	
			茶畑	農地	里山	奥山
マナー	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴミのポイ捨て（峠・バイパス）² ・大峠のバイク ・運転マナーの低下 ・ゴミだしマナーが悪い ・犬の散歩のマナー 		<ul style="list-style-type: none"> ・畦道にある犬の糞 			
不安	<ul style="list-style-type: none"> ・交通量の増加（事故が心配）² ・車の騒音増大 ・車社会 ・通学路の安全 ・広い将来道路に伴う騒音や暴走族 ・バイパス（西脇篠山線）工事の遅延² ・西脇、今田、阿草方面への道路整備されていない ・旧県道狭い 	<ul style="list-style-type: none"> ・子供の安全² ・工場からの騒音 ・格差社会が集落内にも起こるのではないか ・皆が豊かな生活を今後も送れるか 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場整備されていないため将来の農業不安 ・農業 			
	施設関係		<ul style="list-style-type: none"> ・学校までが遠い² ・夜が暗い² ・常夜灯（街灯）が少ない² ・医療機関不足 ・スーパーマーケットが遠い ・個人商店の減少 ・子供との交流の場がない 		<ul style="list-style-type: none"> ・農産物の販売の場がない 	
交通・通信	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡手段が有線と集落だよりだけ ・有線放送をFAXに変える ・公共交通機関不便 ・バス便悪い ・交通の便が悪い 					
不満	<ul style="list-style-type: none"> ・村行事が多い³ ・雑用が多い ・寺の管理寄付等が多い ・でしゃばりが多い ・悪口をいう人がいる ・村が広すぎる ・各組の戸数差が多すぎる ・広場の利用が子供より高齢者優先の雰囲気 ・日常の挨拶が会釈程度に 					



秋祭りの二村神社境内、ハシの舞台へと演出される



二村神社へ神興する秋祭りの祭礼（味間奥）

表-9 地域づくりの方向性・考え方（ワークショップから）

	集落家屋	大国寺 等社寺	農地		山地	
			茶畑	農地	里山	奥山
知る		<ul style="list-style-type: none"> ・二村神社の祭礼 ・大国寺、文保寺 	<ul style="list-style-type: none"> ・荒廃地の現状を見る ・やる気がないのか調査 ・農地の必要性を認識させる ・農業に対する意識啓発 ・共同助け合いの精神確立 			
活用資源	・丹波杜氏		丹波茶			
整備	<ul style="list-style-type: none"> ・周回散歩道 ・ハイキングコース2 ・歴史街道コースを作る ・コース看板整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・整備し多くの人に来てもらう ・滝を作る ・温泉 	<ul style="list-style-type: none"> ・池で釣堀 ・貸農園5 ・滞在型貸農園2 ・荒地をクヌギの森に 	<ul style="list-style-type: none"> ・池で釣堀 ・貸農園5 ・滞在型貸農園2 ・荒地をクヌギの森に 	<ul style="list-style-type: none"> ・展望台 ・水坂に展望台 ・金山の整備 	
	河川				<ul style="list-style-type: none"> ・魚を放す ・河川の整備2 ・公共下水にし川の水をきれいに 	<ul style="list-style-type: none"> ・フナ、コイの放流 ・魚の棲む川に ・住吉川沿いの竹藪の撤去を
景観向上 (修景)	<ul style="list-style-type: none"> ・新県道より景観整備 ・空き家の整理 ・国道176号からの見晴らし 	<ul style="list-style-type: none"> ・大国寺花の整備 	茶畑への眺望		<ul style="list-style-type: none"> ・竹藪の整除2 ・広葉樹林化 ・里山への眺望 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・昔話をまとめ後世に残す ・古老による村内案内ツアー 		<ul style="list-style-type: none"> ・ブランド茶づくり ・ペットボトル化 	<ul style="list-style-type: none"> ・シイタケ栽培 ・栽培方法や土づくりの規定 ・黒豆、米、茶の加工品 ・荒地でフキやワラビの栽培 ・集落独自の転作 ・イチジク、クリ 	<ul style="list-style-type: none"> ・山菜の育つ里山 ・松茸山の里親制度 	
特産開発	<ul style="list-style-type: none"> ・共同宿泊所 ・農家民宿・民泊 	<ul style="list-style-type: none"> ・奥出身の丹波杜氏による酒販売 ・ワイン作り ・日本酒 ・特産品づくり 				
			<ul style="list-style-type: none"> ・住民意識の向上 ・ボランティアグループ ・集落内のボランティア ・非農家の参加を求める3 ・高齢者の生きがいづくりとして ・全員による分担性 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの手で守る 	<ul style="list-style-type: none"> ・シルバーの活用2 ・シルバー作業隊 ・シルバー組織で農作業の助け合い 	
担い手	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO 法人化 ・改善組合の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・共同でつくる ・茶工場の共同化 ・製茶工場共同化 ・組合で管理 	<ul style="list-style-type: none"> ・農地の共同化 ・組合で管理 ・集団化 ・共同化 	<ul style="list-style-type: none"> ・手が周らない所は共同作業で 		
		<ul style="list-style-type: none"> ・共同購入も行う ・共同化の要員としての人材集め ・農業改善組合の充実 				

	<ul style="list-style-type: none"> ・都会の人 ・定年退職者 ・大学生ボランティア 	<ul style="list-style-type: none"> ・オーナー制度 	<ul style="list-style-type: none"> ・里親制度（オーナー制度）3 ・営農支援組織 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・リーダーの発掘と養成 ・農作業者の登録制 	<ul style="list-style-type: none"> ・運営できる人材養成 			
管理体制 ・技術			<ul style="list-style-type: none"> ・管理の向上 ・品質管理の向上 ・農学教室の開催 ・栽培生産技術の向上 ・先進地視察 ・大型機械の導入 		
マネージメント	<ul style="list-style-type: none"> ・松茸料理の民宿 ・共同作業所 ・外部商業施設への窓口設置 	<ul style="list-style-type: none"> ・道の駅 ・朝市の設置2 	<ul style="list-style-type: none"> ・販売所 ・産地直販 	<ul style="list-style-type: none"> ・牧場見学と肉の販売 	
イベント	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会の復活 ・ウォーキング ・集落独自の文化祭 ・凧揚げ大会 ・ホタル祭り ・写真コンテスト 				
情報発信	<ul style="list-style-type: none"> ・FAX 再確認 ・ブログ活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・大国寺の早朝撮影（独り占め） ・大河ドラマ等誘致（波多野氏） 	<ul style="list-style-type: none"> ・丹波茶の改名 ・抹茶づくりと千家とのタイアップ 	<ul style="list-style-type: none"> ・丹波杜氏の冊子作り ・丹波杜氏をテーマのテレビ番組 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・広報活動の充実 ・具体的な連絡者と場所の明確化 		<ul style="list-style-type: none"> ・JRとのタイアップイベント ・都市部デパートへのアンテナショップ ・神戸生協等との販売提携 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・イベント等を新聞記事に ・名誉村民登録 ・都市との交流 				

■地域づくりの方向性

○地域づくり（改修）のテーマ・目標の設定

●味間奥の将来像のイメージ…例えば-

波多野氏偲ぶ二村に紅葉の大国寺、清流住吉川にホタル飛び交い、丹波霧が育むカテキンの里

味間奥-お茶屋で語るツーリズムの里づくり

一茶畑はみんなの庭園、紫雲にのって味間奥の心をみんなで満喫しようー

それを実現するためにすべきこと（基本方針）

●7つの提言⇒7つの行動指針（案）

- ①地域を知る⇒地域の魅力や伝統を子や孫へ語り伝えよう／地域の現実をみんなで共有する
- ②魅力を満喫する⇒みんな歩いて自分の目や耳で地域の魅力や環境を体感しよう
- ③たまりの場を作ろう⇒世代を超えた交流サロン（数奇屋茶屋）
- ④特産開発⇒美味しいお茶を飲みたくなるブランド開発
- ⑤みんなで味わう⇒百人一酒と百人一茶（百人出資で味間奥限定の新酒と新茶を味わう〈一首付〉）
- ⑥三人寄ればコトはじめ⇒様々な体験の試行運用（農家民泊・体験農業・大学生の合宿誘致等）
- ⑦新たな情報発信⇒プロジェクトチームによる検討会の開催ー世代別のワークショップ提言募集

表-10 味間奥の風景カルタ（住民の撮影対象 2007 と選定読み札）

（企画部会）

		撮影箇所	撮影対象	撮影枚数	小計	俳句（読み札）
I. 大 国 寺 ブ ロ ッ ク	社 寺 ・ 史 跡	大 国 寺	大仏・仏像	37	156	本尊と ともに安置の 阿弥陀様 大国寺 本堂薬師 文化財 縁結び 仲を取り持つ 出雲さん 夕映えに モミジ美しい 大国寺 時告げる 大国寺の鐘 朝夕に 歴史あり 重文指定の 大国寺
			祭壇	15		
			境内	10		
			社叢林	9		
			眺望景観	18		
			社殿	14		
			釣鐘堂	5		
			灯籠・石碑	14		
			参道	2		
			稲荷	5		
			地藏尊	4		
			お堂	21		
			額縁効果	2		
		六体地藏尊			4	4
	波多野 秀治の墓	塔状墓石	14	31	戦国の 武将が眠る 秀治の墓	
		墓石群	7			
		墓石	10			
	御霊神社	鳥居・社殿	16	28	ごりょうさん 村のはずれで みておわす	
		石碑	3			
		社叢林	9			
	大乗寺	全景	10	34	ススキ揺れ 満願寺跡に 秋の風	
		社殿詳細	12			
		しめ縄	9			
		石仏群	3			
	鎮守			2	2	
	民 家	中門造（民家）	ピーター邸	10	13	
			その他	3		
波多野家		長屋門	7	14	波多野家の 往時をしのぶ 長屋門	
		説明板	7			
入母屋（妻破風）			3	3		
自 然	里山	山裾・里山	8	12		
		林道	4			
	水辺	河川	6	12		
		ため池	6			
風 景	農地	田園風景	4	5		
		茶畑	1			
	景観	眺望景観	2	4		
		沿道風景	2			
その他			13	2		

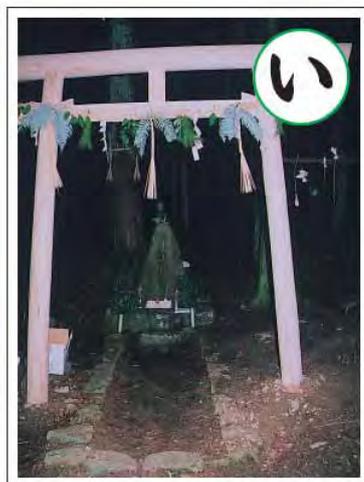
		撮影箇所	撮影対象	撮影枚数	小計	俳句（読み札）
Ⅱ. 文保寺ブロック	社寺・史跡	二村神社	参道並木	4	54	二村の 神に願掛け 正月の朝
			鳥居	5		
			社殿	19		
			稲荷	4		
			境内小祠	6		
			境内	7		
			石碑・看板	3		
			眺望景観	6		
		文保寺 （観音堂・真如院・大勝院）	仁王門	14	100	仁王さん 阿吽の呼吸で にらみつけ その昔 二十一ヶ寺 文保寺 観音堂 歴史を刻む 建造物
			参道・谷川	24		
	サルスベリ		1			
	釣鐘堂		5			
	社叢林		16			
	観音堂		6			
	お堂等		2			
	築地塀		9			
	門・階段	真如院	12	4		
		大勝院	4			
		石積	3	3		
		古墳	2	2		
	自然	諏訪山	小祠	2	5	景色良し 向かいから見る 諏訪の山
			全景	3		
		墓地	4	4		
	山道・登山道	12	12			
	ため池	向池	14	14		
風景	農地	畦・田園風景	7	10	秋の田や 天に向かって 彼岸花	
		茶畑	3		目に映る 新緑の波 お茶畑	
	圃場整備記念碑	2	2	次の世の 豊山豊水 そのままに		
	沿道景観	4	4			
施設	茶の里会館	3	3	集落の 中心にある 茶の里会館		
Ⅲ. 小峠ブロック	社寺史跡	熊野神社	社殿	9	13	
			鳥居	4		
		金鉱山跡	5	4		
	自然	大峠	山なみ	6	14	見晴らしも ここが一番 大峠公園
			展望台	8		霧の海 スッポリ村を 包み込み
		小峠	峠地藏	5	5	もう一度 願掛け参る 小峠地藏
	風景	山の神（奥右衛門谷）				一月は 山の神さん 無事祈る 奥右衛門 村うち照らす 朝日かな
上の池				上の池 水坂の水 満々と		

		撮影箇所	撮影対象	撮影枚数	小計	俳句（読み札）
Ⅲ. 小 峠 ブ ロ ック	風 景	眺望風景		7	7	
		田園風景		2	2	
	施 設	ミニ公園		6	6	
		大谷砂防ダム		13	13	砂防ダム 人と畑を 守りつつ
		その他		1	1	
味 間 奥 全 体						わが村は 一に茶の里 二に大国寺 昔より お茶で知られし 味間奥 良い香り 八十八夜 茶の工場 夏来たれ ホタル飛び交う 神堂橋 ネムの花 あちこちに咲く 山里の夏 やすらぎ園 年に一度の 夏祭り 農作業 一息ついて 丹波富士 茶の里に 太鼓が響く 秋祭り 手塩かけ 見事に育った 黒大豆 まほろばに 高くそびえる 白髪岳 日の出組 願いかなえる 北向き地藏 平和な目 子の無事守る 地藏尊

■みんなで作成した「味間奥風景カルタ 2007」



あ 秋の田や 天に向かって 彼岸花



い 一月は 山の神さん 無事祈る



う 上の池 水坂の水 満々と



え 縁結び 仲を取り持つ 出雲さん



お 奥右衛門 村うち照らす 朝日かな



か 観音堂 歴史を刻む 建造物



き 霧の海 すっぽり村を 包み込み



く 熊野さん 今朝もお参り ありがたや



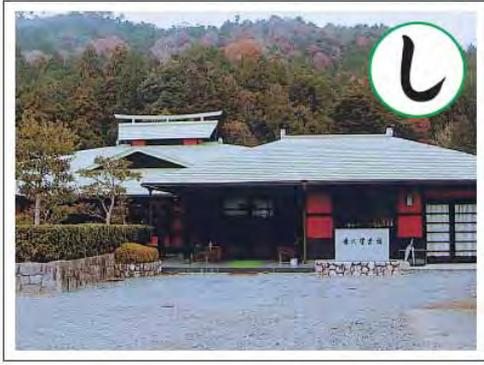
け 景色よし 向いから見る 諏訪の山



こ ごりょうさん 村のはずれで みておわす



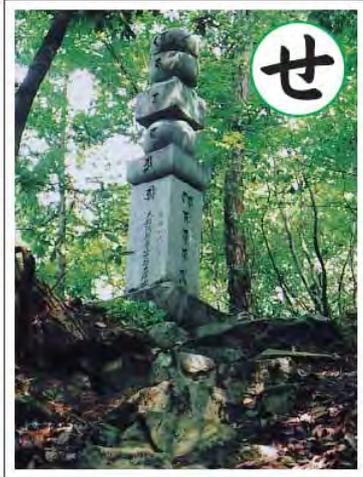
さ 砂防ダム 人と畑を守りつつ



し 集落の 中心にある 茶の里会館



す すすき揺れ 満願寺跡に 秋の風



せ 戦国の 武将が眠る 秀治の墓



そ その昔 二十一ヶ寺 文保寺



た 大國寺 本堂薬師 文化財



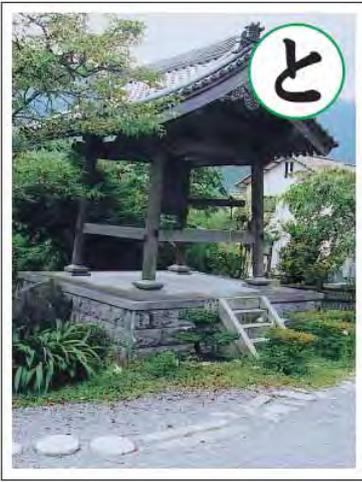
ち 茶の里に 太鼓が響く 秋祭り



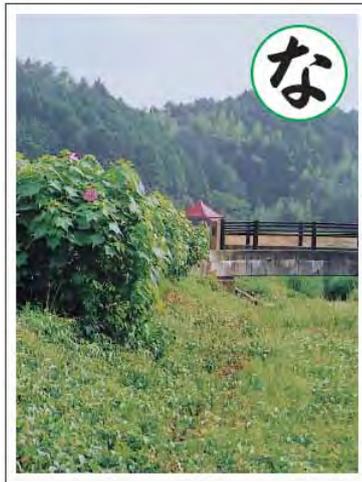
つ 次の世へ 豊山豊水 そのままに



て 手塩かけ 見事に育った 黒大豆



と



な

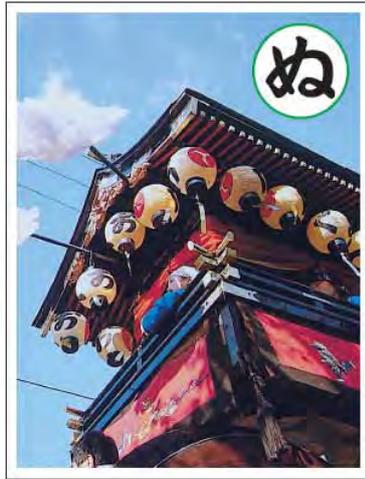


に

に 仁王さん 阿吽の呼吸で 睨みつけ

と 時告げる 大国寺の鐘 朝夕に

な 夏来たれ ホタル飛び交う 神堂橋



ぬ



ね

ね ネムの花 あちこちに咲く 山里の夏

ぬ 抜ける青空 お囃子響く 秋祭り



の

の 農作業 一息ついて 丹波富士



は

は 波多野家の 往時をしのぶ 長屋門



ひ

ひ 日の出組 願いかなえる 北向き地藏



ふ

ふ 二村の 神に願かけ 正月の朝



へ

へ 平和な目 子の無事守る 地藏尊



ほ

ほ 本尊と 共に安置の 阿弥陀様



ま

ま まほろばに 高くそびえる 白髪岳



み

み 見晴らしも ここが一番 大峠公園



む

む 昔より お茶で知られし 味間奥



め

め 目に映る 新緑の波 お茶畑



も

も もう一度 願掛け参る 小峠地藏



や

や やすらぎ園 年に一度の 夏祭り



ゆ 夕映えに モミジ美しい 大国寺



よ 良い香り 八十八夜 茶の工場



ら ランドセル 背負う子供等 世の宝



り 稜線に 秋の陽落ちて こおろぎの鳴く



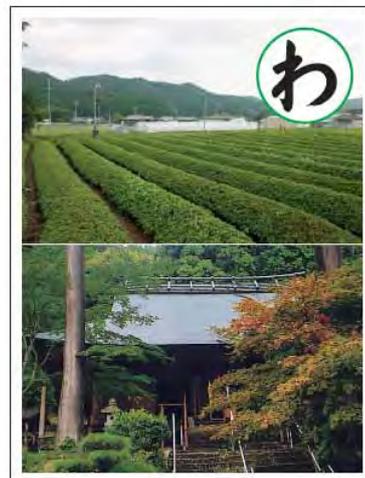
る 留守まかせ 丹波杜氏は 灘五郷



れ 歴史あり 重文指定の 大国寺



ろ 労働の 厳しさのこる 鉱山の跡



わ わが村は 一に茶の里 二に大国寺

○味間奥地区

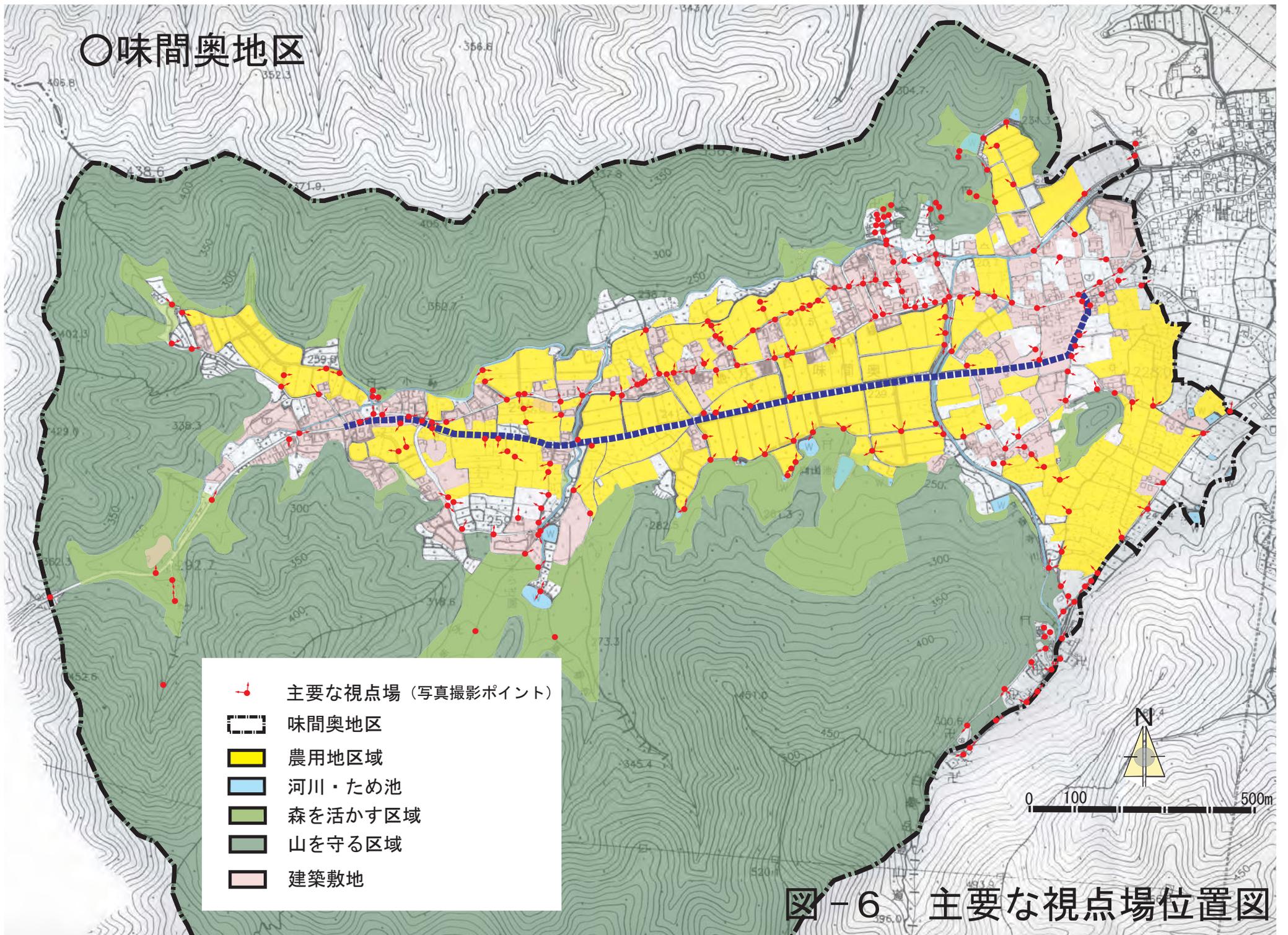


図-6 主要な視点場位置図

○味間奥地区

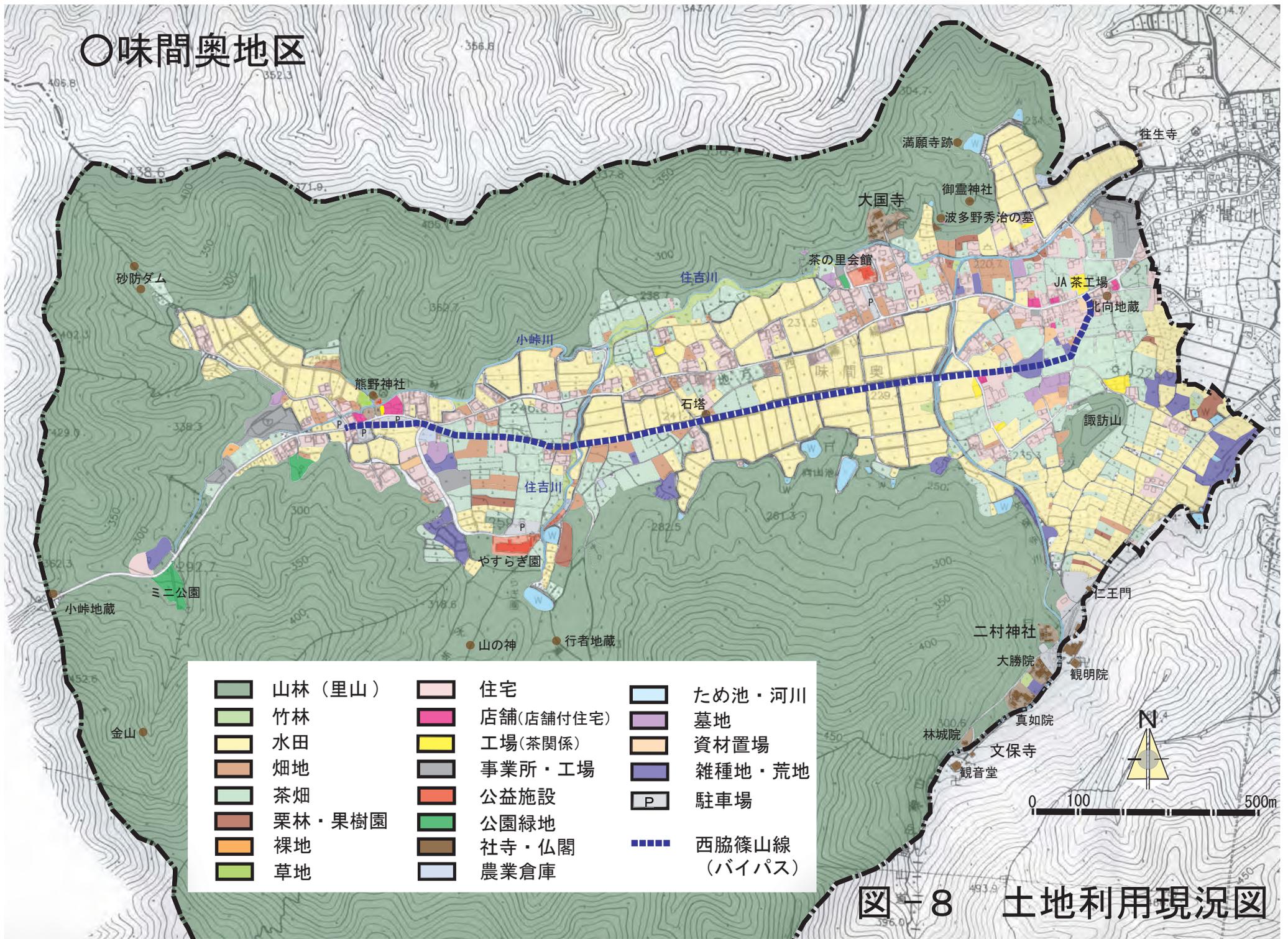


図-8 土地利用現況図

●第2章 計画の基本方針

1. 住民の望む空間像

味間奥地区で調査した住民アンケート(回答者9人)によれば、住民の望む味間奥地区の将来像は、「互いに声掛け合って協力し合えるコミュニティ豊かな里」であり、「自然豊かで、将来も整然とした茶畑の広がる農地が健全に維持された里」である。茶畑等の農地は、農家が少なくなっても「営農グループや組織経営」あるいは「貸農園」として維持され、栽培される茶や黒豆、山の芋等は、将来も特産として人気を博し、花の寺としても有名となった大国寺や波多野家の史跡等にも多くの人が訪れ散策し、交流しあい、集落内には「住民が気軽に集う場や道の駅のような特産販売できる」環境が望まれている。

すなわち大きく開発されるのではなく、現在味間奥が有する環境をそのまま継承しながら、みんなで協力し合って特産開発等により農業が生業として成り立つ環境が志向され、名所の大国寺や茶畑に都市住民が適度に訪れ、交流しあう人情味豊かな里が希求されている。将来の味間奥は、「自然環境豊かで」「茶畑等が健全に維持され、田園環境の広がる」里であり、集落内には都市住民とともに「散策できる安全な環境」と「住民が気軽に集う場」や「特産物の販売する場」が整備された環境といえる。

●住民が描く味間奥地区の将来像（味間奥地区里づくりアンケート調査から）

- 若い人たちとも話ができるような集まり、行事があればうれしい。みんなで協力して何でもしよう。(50代女性)。
- 休日等には都会から家族連れが大国寺を中心に茶畑等を散策する姿が見られ、農作業している人(自分)に集落の見どころ等について話している、そんな味間奥(50代男性)。
- 後期高齢化が益々進み、茶畑等の荒廃化の拡大が心配。景観が維持できる体制作りのために、昨年結成された「結いの会」の組織拡大をし、少子高齢化の担い手不足を解消し、美しい茶畑等を維持したい(60代男性)。
- 自然に囲まれて、住民が仲良く暮らせる村。みんなでよい村づくりにつながるように知恵を出し合い、よいことは力を合わせて実現しよう。歩道には「花」、様々な魚や虫たちが見られる道を元気に闊歩しよう(50代男性)。
- 子供たちも結婚して孫もいて、家族楽しく暮らしてる。世代に関係なく、集まれる行事があればいいな(50代女性)。
- 集落エリアは拡大したにもかかわらず、何かにつけ整い、お互い声掛け合って向こう三軒両隣の意識が漂い、みんなが助け合っのびのびと余暇を過ごしてる。そして、松茸、茶、黒豆の特産物が、超人気となり、集落をその収益で賄っている、そんな味間奥であって欲しい(60代男性)。
- NHK で放送されるとすぐにお客さまが訪ねて来ます。若者は U ターンして共同して特産物の茶・秋の豆を育て、歩く歩道は整い、遠方からも散歩や自転車で茶畑を訪ねて集まってきます。今日も共同売店の安全で新鮮な野菜や特産物は、完売。明日も元気に声掛け合って頑張りましょう。公園で遊んでいた子供たちも元気に帰ってきました(60代女性)。
- 散歩するのが楽しく、沿道には四季折々の花が咲き、学び多い環境づくりを…(60代)。
- 有機農法の農作物が味間奥のブランドとなり、インターネット直販により高値で取引。週末は観光客が集まり、農作物の収穫に参加し楽しむ。新しくできた小さな宿泊施設は、地元の幸で、舌鼓。安心安全な食材を提供する味間奥には、ロハスを楽しむ人々で今日も賑わう(40代男性)。
- 現在135軒の農家は、30軒余りになったが、貸農園で維持されている味間奥の田園風景は変わらない。きょうも活発なコミュニケーションの場となり、朝夕、散策する住民も多い。緑が多く、空気がきれい、人情豊かなわが里には、元気な老人が集まるサロンがあり、仲間たちがいつも笑顔で集まっている、味間奥は、わが故郷である(60代男性)。
- 大国寺が花一杯の寺として有名になり、訪れる人が多くなるにつれ、悲運の戦国武将波多野秀治の眠る里としても知られるようになった。空家は宿泊施設として利用され、貸農園とタイアップして活用されている。整然とした茶畑の中で、集落民が楽しく集い、老若男女が語り合っている。豊かな自然と伝統文化が息づき、人情味あふれる里(60代男性)。

2. 味間奥地区の将来像

住民の読んだ俳句に「わが村は 一に茶の里 二に大国寺」とあるように味間奥の景観的特徴は、緑の帯の広がる茶畑である。住民のアンケート結果でも茶畑のある田園環境をできるだけ保全継承することを望んでおり、茶の里のイメージは、紅葉の古刹大国寺等とともに住民の誇りともなっている。地域住民は、こうした茶畑の広がる田園環境を保全し、継承することによって都市住民等が訪れ散策し、住民とふれあい交流することが期待され、この訪れ散策できる環境づくりを通して、特産販売や貸農園化等を実施し、将来にわたって茶畑等の田園環境を維持・継承していくことが期待されている。ただしそのためには、集落営農や共同化により、経営の一元化等に取り組むことも求められている。

□茶畑のある田園環境の保全継承

味間奥地区の将来像は、できる限り茶畑の広がる田園環境を保全維持することであり、茶の里の風景に期待して訪れる人々を失望させないことである。何度も自然や茶畑の広がる田園環境を求めて来訪する人々を心地よく受け入れ、散策できる環境づくりが求められる。いくなれば来訪者をもてなすホスピタリティ(丁寧にもてなす好意と誠意)の高いデザインが必要であり、来訪者をもてなす環境づくりが、地域住民にとっても居心地のよい快適な生活環境に結び付く必要がある。すなわち、茶の里として来訪者の期待を裏切らない「景観づくり」と、訪れた来訪者を「楽しませる場や施設」づくり、そして「地域住民が集い交流することのできる場」づくりが求められている。

来訪者を楽しませる場や施設とは、茶畑等を「散策できる環境」とすることであり、その散策空間のネットワークに関連付けて「地域住民のたまり場や交流する場」を設けることである。

□茶の里の目指す環境イメージ

味間奥の目指すべき、茶の里のイメージは、単にまとまった茶畑が分布するだけでなく、適切に維持管理された茶畑の帯の中に里人が大切に育んできた想いや、時間をかけて形成してきた文化的な風土が息づき体感できる環境づくりである。整然とした茶苗の美しさに里人の情愛を感じ、何百年間にもわたって形成されてきた味間奥特有の平坦な茶畑と近代の霜よけ設備に、時間が培ってきた本物の風土を感じたい。食ともなる特産の農作物は、安心安全なイメージとなり、訪れた人に潤いとゆったりとした安心感や満足感を与え、背景の山並みや溪谷の竹林のある沢やため池と調和した田園の美しさは、垣間見る生き物たちとともに自然の豊かさのイメージを増幅させる。

里山や諏訪山を背景とした豊かな茶畑の緑空間の中に息づく古刹や茅葺等の古民家が分布する景観は、日本人のふるさとのイメージとともに懐かしさと親しみを加味し、厳しい修験の足跡や波多野家の人々の悲哀を重ね見るとき、遠望される優美な高城山とともに味間奥の里が有する文化的な風土の重みを感じることができる。やさしい緑豊かな風景の中に整然とした茶畑や修験の厳しさ、そして歴史的なロマンが漂い、実直で素朴な里人の所作と協働の笑顔を目にすることができる。こうした真に豊かな茶処としての風土を満喫できる環境こそ、茶の里:味間奥が目指すべき将来像といえる。したがって味間奥地区は、丹波の「茶処庭園」の里として、目指す将来像を次の三つとする。

波多野家俣ぶ二村に紅葉の大国寺、清流住吉川にホテル飛び交い、丹波霧が育む力丹波の茶処

丹波の「茶処庭園の里」:味間奥

①茶畑と共生するさと ②歩いて自然と歴史にふれあうさと ③心豊かな交流のさと

—茶畑はみんなの庭園、紫雲にのって味間奥の心をみんなで満喫しよう—

■丹波の茶処庭園の里として目指すべき三つの里のイメージ

①茶畑と共生するさと

・遠く仰ぎ見る白髪岳や緑の諏訪山を背景によく手入れされた茶畑がなだらかな扇状地に広がり、ほっこりと心豊かになれる里。茶畑とともにくらす里の豊かさを伝えよう。

②歩いて自然と歴史に触れあえるさと

・高城山を借景に田園風景を楽しみながら、茶畑の庭園を散策し、生き物が生息する豊かな自然と悠久の歴史に出会える里。四季折々の草花の咲く、畔や谷川の堤防、驟の参道や石畳を登りながら、足裏で自然と歴史を体感しよう。

③心豊かな交流のさと

・みんなで楽しみながら、互いに協力して里づくりを推進しよう。訪れる人たちと共に交流しあいながら、笑顔がはじける元気な里。内外の若者たちとともに連携しあいながら、茶処が育む心の豊かさを未来に伝えよう。

3. 計画の基本方針

①茶畑と共生する里づくり

味間奥のシンボルでもある茶畑を核に田園景観を保全継承する。

農用地の水田地は、味間奥の生産基盤としてできる限りまとまった農地として保全継承する。特に奥上門谷、向山、そして小峠川と住吉川沿いのまとまった農地の保全に努め、無秩序なスプロール化を防止する。向山や御霊神社東の農地は水源のため池や水路とともに保全維持する。

茶畑は、住吉川沿いと諏訪山裾部の二つの扇状地地形に沿ったまとまりを保全するとともに幹線道や街路、主要な施設からの眺望性に配慮し、茶畑の背景となる裾部や境界地の修景整備に努めるものとする。特に茶工場の修景整備を図るものとする。

家屋間に介在する農地は、味間奥特有のゆとりある散居状のたたずまいを形成しており、この農地や茶畑、菜園が維持管理されていることが、集落環境イメージに大きく作用する。茶処庭園としての四季の変化や季節感、眺望される茶畑や農用地よりもむしろ家屋間に介在する農地によって増幅されている。したがって、家屋の庭木と一体をなす緑地として家屋景観や街並み景観として捉える中で身近な緑地空間として、建物との構図性、接道部の四季の演出に重点をおいた地権者合意に基づく紳士協定等による修景整備を推進する。



家屋間に介在する茶畑

②歩いて自然と歴史に触れあえる里づくり

味間奥の茶畑庭園を散策する散策道(フットパス)は、味間奥の自然や歴史的な魅力資源を相互にネットワークする散策道であると同時に、茶の里としての風景を楽しみ味わう散策道である。すなわち茶の里の風景を、歩きながら回遊し味わう観客席ともいえるもので、今後の茶処庭園の修景整備は、この散策道からの見え方に配慮しながら、構図性を踏まえ、検討していくこととなる。

歩いて自然と歴史に触れあう散策道は、安全な道が原則となるが、幹線道路の歩道や舗装された道よりもむしろ、畔や家屋間の露地等を基本に、より自然と歴史に触れあうものとしたい。歴史は史跡や文化財を相互にネットワークするとともに、参道や石畳、鳥居、地蔵といった歴史的資源の見せ方(近づき方)にも配慮する形でルートを設定し、シミュレーションする。

自然の豊かさは、畔や菜園の柿木、稲木の畦畔木、家屋の庭木、谷川の堤防等が目安となるが、既存の街路だけでなく、畔等を積極的にルートに取り入れ、大人がすれ違う程度の幅員1.2m程度の広幅員の畔道(既存畔の2.5倍程度)を散策道として整備していくものとする。何よりも落ち葉や草地、土や霜柱の感触等、足裏で大地の自然を味わうものとしたい。



家屋裏手に分布する菜園畠の樹木



今も使われている稲木

③心豊かな交流の里づくり

ワークショップでは、住民が自然に集まり雑談するたまり場やサロンが欲しい要望が強かったが、既存の茶の里会館ではなぜそれができないかが、課題となろう。場所の前に集まるためには何が必要か検討すべきである。

茶畑は、地域のシンボルであり、私有地であっても地域としての公共性は大きい。茶工場も同様である。地域の地場産業を支える生産の場が茶工場であり、生産機能一辺倒の工場から、茶の話題や談話なども楽しめるホスピタリティの高い施設へ改善していく必要がある。特に茶の里を訪れる人たちの期待にこたえるためには、見学施設としての機能も付加し、茶の生産工程や手もみ等が体験学習できる施設にしていく必要がある。茶生産自体も訪れる人たちとともに共存する施設(企業観光として機能する施設)に改変していく必要がある。

また、幹線道路が整備された一環として、味間奥の道の駅的な特産販売店等も検討したい。地域で朝市等も催し、住民の企画展示(ギャラリー)や気軽に集まれるサロンや来訪者と交流する場所としても整備が期待される。特にバイパス沿いに里づくり協議会の合意に基づく施設が建設されることで、里づくり計画のガイドラインに沿った開発施設とし、今後の施設デザインの先導的役割を担う施設として、積極的に味間奥のまち並み景観と調和した施設を建設し、屋内外一体の開放的施設として、茶処の里にふさわしい交流施設としたい。これからの営農組合等の結成にも寄与する施設と位置付けることもできる。茶の里の販売拠点であると同時に味間奥内外の交流拠点であり、情報発信や地域の散策案内の拠点ともなる多目的な地域のマネジメント性(地域経営)を備えた複合施設である。

味間奥地区の茶畑を活かしたホスピタリティの高い交流の里づくりは、茶処を期待して訪れた人を温かく迎え、来訪者の期待に応える環境づくりを目指す必要がある。半日から1日程度は十分味間奥に滞在して楽しめる里づくりを目指すものであり、味間奥地区にある全ての資源やストックを訪れる人たちの観賞や体験に堪えるものに変えていく必要がある。そうした環境改善が地域住民の愛着や誇りを高め、生きがいがづくりやコミュニティ形成につながっていくこととなる。



畦に設置されている案山子(味間奥)